

炕カンのある暮らし（其の二）

—延辺朝鮮族自治州の概況調査から

西澤治彦

はじめに

調査日程と調査地

延辺朝鮮族に関する先行研究

延辺朝鮮族自治州および延辺朝鮮族について

事例報告

(1) 図們市紅光郷下嘎村

(2) 図們市長安鎮長青村

(3) 龍井市光新郷偉心村

(4) 延吉市内の民家

(5) その他

朝鮮半島の民家の類型と中国の朝鮮族の民家

朝鮮半島の民家と炕

中国朝鮮族の民家と炕

調査資料の考察

延辺朝鮮族の炕の特徴

調査データの一覧

漢族と朝鮮族との相互影響について

農村と都市との生活習慣の違いについて

「火炕楼」と「暖気楼」について

今後の展開と研究の課題

引用・参考文献

はしめ

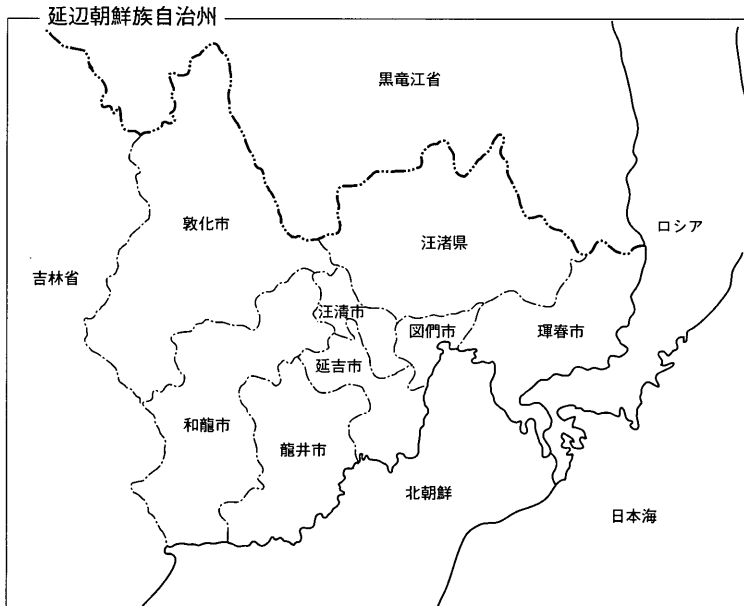
二〇〇三年の三月末から四月にかけて、吉林省の延辺朝鮮族自治州を訪れる機会があった。当地へは今回が初めての訪問であったし、期間も短いため、広く延辺朝鮮族自治州の概況をみてくるといのが目的であった。

とはいえ、従来から「炕」^カに興味を持っていたので、拠点とした延吉市内や、訪問した図門市、龍井市などの農村においても、朝鮮族と漢族の炕をみせてもらった。いくつかの炕を見ていくうちに、私が前回の遼寧省の調査でみた朝鮮族ものとは様式が全く違うことと、漢族の炕も、遼寧省の農村とは逆に、漢族側が明らかに朝鮮族の影響を受けていることがみてとれた。帰国後、文献を読み直すことによって、延辺の朝鮮族は国境の図們江を境に隣接している咸鏡道の出身者が多く、民家の間取りや炕の様式には咸鏡道の様式が残されていることを知った。この意味で、この地の炕の様式は、東北地方の朝鮮族の炕を考える上で比較の指標となるものである。このほか、城市内にある「楼房」(三―四階建ての建物)の中には、各階の各戸に炕がある集合住宅(これを「火炕楼」と呼ぶ)があることなども新発見であった。

今回は本格的な調査ではなかったが、このように重要なデータが得られたので、調査の覚え書きとして、ここに整理しておくこととする。従って本稿は、二〇〇二年に発表した「炕のある暮らし―遼寧省新賓県満族自治県の農村調査から」(本誌三四卷一号)の続編をなすものである。なお、農村訪問には木村光彦氏も同行し、漢語の得意でない朝鮮族の老人に話を聞く際、朝鮮語で質問をしていただいたことを記しておく。

調査日程と調査地

- 三月二十八日 大連入り
三月二十九日 延吉入り
三月三十日 延吉市内をまわる
三月三十一日 図們へ、途中の図們市紅光郷下嘎村にて
漢族宅一軒・朝鮮族宅一軒、図們市長安
鎮長青村にて漢族宅四軒・朝鮮族宅一軒
をまわる
四月一日 延吉市内の「平房」や「火炕楼」を見て
まわる
四月二日 龍井市へ、途中の光新郷偉心村で朝鮮族
宅一軒・漢族宅一軒をまわる、夜大連へ
四月三日 旅順へ、途中の農村でも炕をみる（調査
はず）
四月四日 大連発



延辺朝鮮族に関する先行研究

延辺朝鮮族自治州に関しては、現在、すでにいくつかの先行研究がある。概況としては延辺朝鮮族自治州概況編写組『延辺朝鮮族自治州概況』（一九八四）〔本書は帰国後、訳本が出ていることを知った—大村益夫訳『中国の朝鮮族』（一九八七）〕と、高崎宗司『中国朝鮮族』（一九九六）とがあげられる。また現地で購入したものに、延辺朝鮮族自治州地方志編集委員会編『延辺朝鮮族自治州志』（一九九六）がある。さらに歴史的な研究としては、鶴嶋雪嶺『中国朝鮮族の研究』（一九九七）が刊行された。本書は朝鮮族の中国への移住の歴史と朝鮮族社会の成立が主題であるが、当然、延辺地方も大きく扱われている。

民族学的な調査研究報告としては、戦中の調査研究に千種達夫の『満州家族制度の慣習』（一九六七）がある。この中の第三、四部で延吉の漢族と朝鮮族に関する報告がある。その後、調査研究は長らく中断を余儀なくされていたが、改革解放以降、徐々に外国人による調査も可能になってきた。一九九〇年代以降、再開された調査研究のうち、新しいものでは、中国東北部朝鮮族民族文化調査団編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』（一九九九）、および佐々木衛・方鎮珠編『中国朝鮮族の移住・家族・エスンシティ』（二〇〇一）がある。前者は東北地方一般の朝鮮族を扱っているが、第三部第二章の「食文化の変遷」が延辺朝鮮族自治州での調査に基づく。後者は主に延辺朝鮮族自治州が調査地となっている。この二冊は遼寧省新賓県の調査報告を執筆する際にも参考にさせていただいたが、今回の調査では朝鮮族が主な対象となったため、大いに参考になった。とはいえ、私の従来からの視点である、炕を中心とした生活に関しては、両者とも決して十分な調査がなされてはいない。これは現地で入手した延辺朝鮮族自治州に関する

中国語文献でも同様であった。唯一、『中国東北部朝鮮族の民俗文化』に収められている池春相の「住文化の特色」は東北地方の朝鮮族の民家の類型化を試みており、興味深く読んだ。しかしこれは朝鮮族が主題のため、漢族側の視点が省かれている。東北地方の文化変容を考える際には、漢族、満族、朝鮮族の三者の相互作用に目を配ることが求められよう。

延辺朝鮮族自治州および延辺朝鮮族について

ここで、『延辺朝鮮族自治州概況』『中国朝鮮族の研究』『中国朝鮮族の移住・家族・エスンシティ』などの先行研究をもとに、延辺朝鮮族自治州および延辺朝鮮族の歴史と概況を整理しておきたい。

延辺地域の歴史を振り返るならば、遠く高句麗（前一一七世紀）や渤海国（八一—一〇世紀）の時代、その版図に含まれていた。その後、遼朝、金朝、元朝の支配を経て、清朝になると、満族は祖先誕生の聖地を保護する意味で満族以外の当地への入植を禁止した（一六六八年）。この封禁政策は一九世紀中葉（一八七五年）まで維持されたが、実際には相当数の朝鮮族が、経済的理由などによりこの地に越境していたと考えられる。一八九〇年、図們江以北の朝鮮族の流民は数千人の規模であったが、一九〇七（光緒三三）年には、一〇余万人に達していたという。一九〇一年、義和団事件に際しロシア軍がこの地に出兵し一九〇六年まで占領する。ロシア軍が撤退すると、日本は朝鮮族の保護を名目に龍井に朝鮮総督府間島派出所を開設し、この地域を朝鮮領とみなして行動した。清国側もこれに対抗し、一九〇九年、日本と清国との間に「間島協約」が結ばれ、領土が確定（図們江をもって清韓の国境とする）し、延辺地域は清国に帰属することとなった。翌一九一〇年には日韓併合が行われる。

なお、延辺という名称は、民国期の一九一〇年代になって、中国と朝鮮が隣接していることなどから呼ばれるようになった。このころ、朝鮮族の朝鮮半島からの移住が再び活発化し、一九三三年には三二万人の朝鮮族が移住していたという。その後、一九三三年に日本が東北地方に満州国を建国すると、一九三四年、延辺を「間島」と改称し、龍井に日本領事館をおいて統治した。一九三二年当時、地区全体の人口は五三万人で、うち朝鮮人は四〇万余人、満州国籍一一万六千人、日本人七千人という構成であった。ところが一九四二年には朝鮮族の人口は六二万余まで増加する。これは一九三六年から一九四一年にかけて日本政府が朝鮮族を東北三省に政策的に移住させた結果であった。

このように満州国の建設は朝鮮族の東北地方への移住を加速させる結果となったが、一九四五年の日本の敗戦をうけて、多くの朝鮮族が帰郷した。この結果、延辺の朝鮮族の人口は一時、激減した。一九四九年の建国時、延辺の総人口の八三万五千人のうち、朝鮮族人口は五一万九千人、漢族人口は二八万八千人であった。

一九五〇年に朝鮮戦争が勃発すると、延辺から五〇〇人以上の朝鮮族の義勇兵が参戦し、そのほとんどが犠牲となった。この貢献もあつて、延辺は一九五二年に自治区が成立し、一九五五年には自治州に改められた。とはいえ漢族の人口は増加しつづけ、一九五八年に漢族人口の比率の高い敦化県が延辺朝鮮族自治州に移管された結果、従来の朝鮮族が過半数を占める形勢が逆転した。

改革以降の動きでは、一九九二年の韓国との国交樹立は延辺朝鮮族自治州に大きな変化をもたらした。それまでの北朝鮮との関係に加え、韓国との交流は、産業の活性化や韓国への出稼ぎなど経済的な側面に限らず、朝鮮族のアイデンティティーに再考をせまるものであった。しかしながら当初の期待や熱気が冷めると、延辺の朝鮮族は、北朝鮮や韓国との連携を保ちつつも、民族的には「中国の朝鮮族」というアイデンティティーの確立へと動いているのが現状である。

次に人口分布をみてみたい。現在の延辺朝鮮族自治州には、延吉市、敦化市、図們市、龍井市、琿春市、和龍市の六市と汪清県、安図県の二県があり、五〇の鎮、五五の郷、一四三〇の村がある。

延辺朝鮮族自治州には漢族、朝鮮族、満族などの民族が居住している。一九九三年の自治州の総人口は二二一三万八千人で、うち漢族が一二二万一千人（五七％）、朝鮮族が八五万四千人（四〇％）、満族が五万五千人（三％）を占めている。また、自治州の朝鮮族人口は、中国全体の朝鮮族総人口（二〇〇万余）の四二％を占めている。

延辺朝鮮族自治州内における民族の分布には濃淡がある。漢族は主に敦化市と汪清県、安図県に多く住んでいる。朝鮮族は主に延吉市、龍井市、和龍市に多く住んでいる。なかでも龍井市における朝鮮族人口は六五％ともっとも高い。逆に琿春市は城鎮内に居住する朝鮮族の人口が一七％ともっとも少ない。満族は琿春市、敦化市、汪清県に多く住んでいる。

また朝鮮族の出身地であるが、一九二六年の資料では、全人口三五万余のうち、圧倒的多数は中国国境に隣接する咸鏡北道で二六余万人、これに次ぐのが咸鏡南道の三万人で、後の韓国に帰属する南方からの出身者は一万二千人に過ぎなかった。これは比較的古い統計であるが、現在でも基本的に北からの出身者が多いという点は変わっていないようである。

もつともこれは延辺朝鮮族自治州に限つてのことであつて、東北地方全体では、中国に隣接する咸鏡道や平安道の出身者に加え、満州国時代に朝鮮半島の各地から移住してきた人々とからなる。延辺朝鮮族自治州というと、外国人は東北地方各地に散らばる朝鮮族の「心の故郷」「民族文化の発信基地」のようないイメージを持ちがちであるが、遼寧省や黒竜江省の朝鮮族にとっては、民族的なアイデンティティーは延辺にはなく、むしろそれぞれの移住前の出身地にあるという。その意味で、延辺朝鮮族自治州というのは、必ずしも東北地方の朝鮮族の「中心地」ではなく、

複雑な歴史的背景を持つ特殊な地域であるといえる。

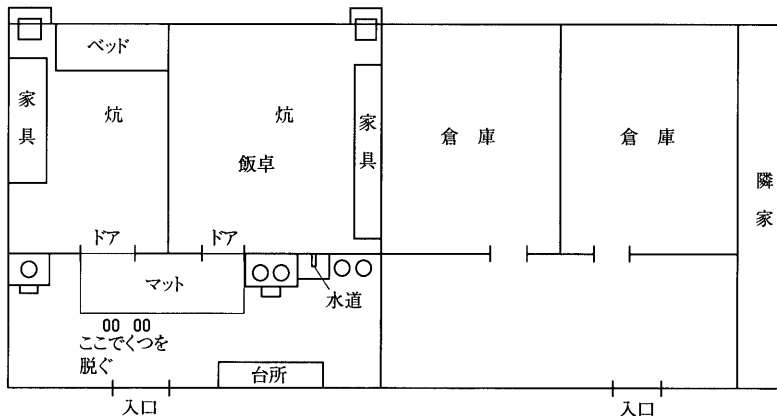
事例報告

(一) 図們市紅光郷下嘎村

劉氏宅 (漢族) 【図1】【写真1-8】

紅光郷下嘎村は、延吉市よりは図們市に近い位置にあり、漢族と朝鮮族との雑居村である。劉氏によると漢族が六割、朝鮮族が四割と、漢族の方が多いという。両者は雑居していても、完全に混ざり合っているのではなく、互いの集住地域に大きく二分されているようである。家屋の外見からは見分けがつきにくいのが、漢族の場合、必ずといっていいほど、門の所に色鮮やかな「春聯」が貼つてあるので、これでは漢族であると分かる。家並みは古いものから新築までさまざままで、この村が目下大きく変動していることを窺わせる。実際、訪ねた劉氏宅は一九九九年に新築したば

図1 図們市紅光郷下嘎村 劉氏 (漢族)



炕の高さ25cm
くらいと漢族
にしては低い



写真2 劉氏宅（左側）の玄関側



写真1 図們市紅光郷下嘎村の全景



写真4 右側の部屋の炕の上で近所の主婦らが麻雀に興じているところ



写真3 入り口に入ると、すぐに二つの炕の部屋へのドアがある



写真6 麻雀のほか、食事にも使う「飯卓」



写真5 右側の部屋の隅に置かれた家具類

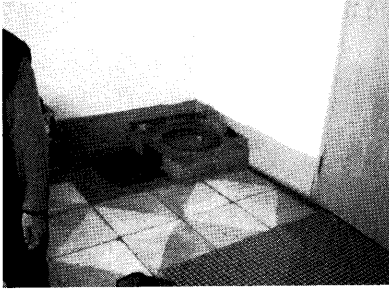


写真 8 左側の部屋の炕の竈

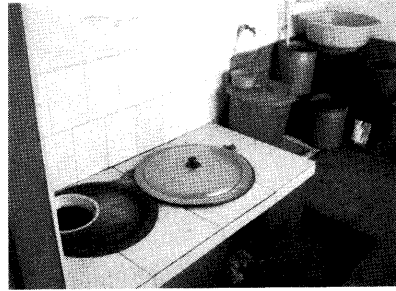


写真 7 右側の部屋の炕の竈

かりで、その理由を聞くと、延吉―図們間の高速道路の建設に伴い、村内の家屋の一部が移転を余儀なくされたためだという。移転を受け入れる形で新築の家を建ててもらったという。

一九九九年に新築したということで、劉氏宅はこの地方における家屋や炕の新しい動向を表しているといえよう。建設費を節約するためか、この建物は長屋になっており、八部屋つづく長い家屋の左半分側が劉氏宅となっている。

劉氏宅の炕は、決して伝統的な漢族ではなく、明らかに朝鮮族の影響を色濃く受けている。まず、炕の面積が大きく、現在住居として使用している二間とも床の全面を炕にしていること、第二に、炕の高さも一般の漢族のものよりは低く、二五センチほどとなっていること、第三に、二間のドア前のコンクリート地面に大きなマットが敷き詰められ、炕の上からではなく、そのマットの上ですでに靴を脱いだ生活をしていることがあげられる。

これは伝統的な漢族の炕ではなく、朝鮮族のものに近いのではと質すと、確かにその通りで、この地でもう二〇年来、漢族も朝鮮族のような「大炕」を作るようになっていくという。部屋一杯に炕が広がっているため、「炕浴」はなく、それに相当する炕の縁も入り口の八〇センチぐらいしかない。さらに炕も二五センチほどと低いので、「炕浴」に腰掛けるということもできない。

訪ねたときは、近所の主婦らが集まり、ちょうど麻雀をしているところだった。「炕沿」に腰掛けることもなく、椅子や八仙卓も無いところをみると、座法に関する限り、生活様式は完全に朝鮮族のものと同じといってよいであろう。但し漢族なので「炕頭」「炕梢」という言い方はするという。また蒲団の敷き方を訊ねたが、部屋が正方形で広いせいか、「隨便」（適当に敷く）とのことであつた。

「炕席」について聞くと、もう「炕席」は使わなくなつて、現在ではビニール地の「炕板膠」を使つていふ。また「炕卓」について聞くと、これも今は使わないという。麻雀をしている丸い卓がそうではないかと聞くと、これは「飯卓」と呼ぶということであつた。どうやら、「炕席」「炕卓」とも伝統的なもの（「炕席」はむしろで編んだもの、「炕卓」は長方形の卓）のみをそう呼び、これらは一般名詞とはなつていないようである。

なお、この「飯卓」は、大きさ、高さなど一昔前の日本のちゃぶ台によく似ている。但し、表面には蓮の花と思われる絵柄が描かれており、自作ではなく、明らかに既製品である。（別な家でもまったく同じ飯卓を目にしたので製造元は同じと思われる）

この影響の物理的要因は、冬は氷点下三〇度にもなる極寒の地であるため、漢族もより暖房面積の広い「大炕」を求めたものと考えられる。もう一つの文化的要因は、やはり北朝鮮に近く、朝鮮族が多く住んでいる地域であり、マイノリティーである漢族がマジョリティーである朝鮮族の影響下にある、ということが考えられる。

もう一つ劉氏宅で興味深いのは、二世帯住宅となつていふことである。右側の二間は現在は倉庫になつており、炕も作つていないが、将来子供が結婚したら、この二間を子供夫婦の部屋にする予定であるという。入り口は別になっているが、将来、竈や炕も別に作るということ、こうなると完全な二世帯住宅となる。都市部、農村部を問わず二世帯住宅というのは初めて見た。またこの例のように、炕は必ずしも家の建築と同時に作るものではなく、必要に応

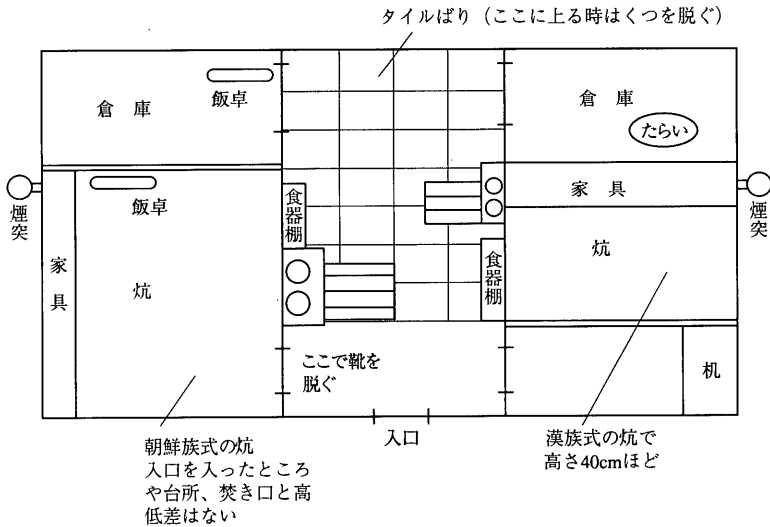
じて後に作ることを知った。

某氏（朝鮮族）【図2】【写真9-14】

もう一軒、今度は朝鮮族の炕をみてみたいということで村内をまわり、とある朝鮮族宅におじやました。外観からしてまだ築一〇年もたっていない家であった。朝鮮族の家らしく室内は整理整頓されているばかりでなく、床もきれいに磨き上げられていた。

この家で初めて当地の朝鮮族特有の炕の様式を目にした。それは写真の如く、単に床と段差のない炕が部屋一面に敷き詰められているばかりでなく、竈の前の部分が深さ一メートル近い窪地になっており、その上に板がかぶせられている。普段はその上を歩くこともできるが、炊くときはこの窪地の中に入り、小さな椅子に座って作業をする。窪地の中には薪なども置かれており、燃料の置き場所や収納場所ともなっている。後日、延辺朝鮮族自治州内で訪れた朝鮮族の炕はすべてこの形式であった。この様式の場合、靴は焚き口

図2 図們市紅光郷下嘎村 某氏 朝鮮族



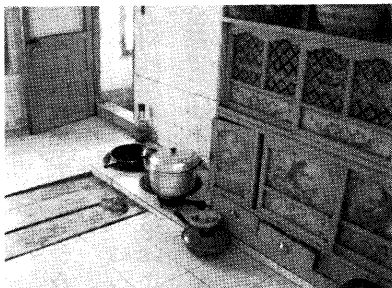


写真 10 入り口側から見た右側の部屋の竈

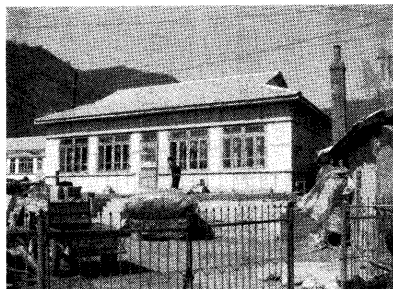


写真 9 某氏（朝鮮族）宅の全景



写真 12 左側の広い部屋の炕 壁際に折りたたまれた飯卓がみえる

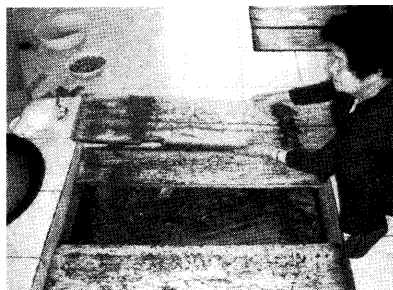


写真 11 左側の部屋の竈の焚き口の板を開けるところ この家の場合、左右の部屋との間に壁があるが、この竈と台所のスペースが後述する「鼎厨間」に相当しよう

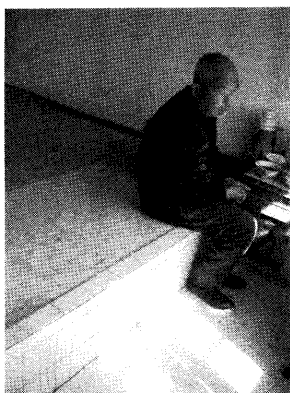


写真 14 右側の漢族様式の炕 訪ねたとき、父親が炕に座って食事をしていた



写真 13 その部屋の家具類

の周りのタイル張りの部分に登る際に脱ぐし、入り口の土間と焚き口との間にも壁がないため、一面が同じ高さで、非常に開放感がある。焚き口の窪地も収納スペースとなっており、非常に合理的にできている。

炕を朝鮮語でなんと呼ぶかと聞いたところ、「オンドル」ではなく、「クドウル」というという。これは方言で、延辺朝鮮族自治州一体ではこのように呼ぶという。また、この家にも、劉氏宅でみたのと同型の丸い「飯卓」があった。全部で二つあり、一つは炕の部屋に、もう一つは倉庫に立て掛けてあった。これは「バプサン」と呼ぶとのことであった。

ところでこの家は朝鮮族であるが、興味深いことに、入って右側の部屋に、漢族式の高い炕を設けている。写真でもわかるように、これは漢族の影響を受けた朝鮮族式の炕ではなく、完全に漢族式のものである。但し、焚き口は朝鮮族式であり、この意味では折衷した形式ともいえる。同行してくれた旅行社の人によると、この家には老人がいるため、腰掛けやすいようにと漢族式の炕を設けている、と説明していた。いまままでみてきた朝鮮族の家の中で、このように漢族式の炕をあわせて設けている例は初めてみた。

(二) 図們市長安鎮長青村

図們市長安鎮長青村は、延吉市と図們市を結ぶ幹線道路沿いにある、比較的大きな集落である。位置的には延吉市に近い位置にあり、漢族の割合が八〇九割、朝鮮族の割合が一〇二割ということなので、厳密には漢族と朝鮮族との雑居村であるが、基本的には漢族村といつてよからう。ここでは、漢族宅四軒、朝鮮族宅一軒をまわった。



写真 15 古い泥房を正面からみたところ

図 3 図們市長安鎮長青村
古い泥房、かやぶき屋根（漢族）

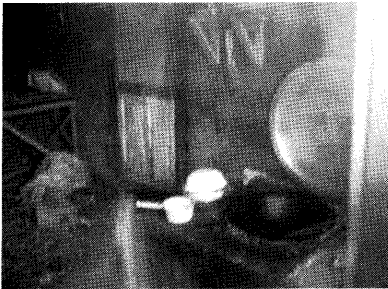
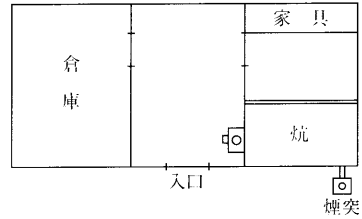


写真 17 竈、漢族式で中華鍋が一つあるだけとなっている



写真 16 漢族式の炕

古い泥房

【図 3】【写真 15—17】

村内でも、こうした泥房でかやぶき屋根の古い家はほかになかった。築数十年の相当古い家で、それだけに伝統的な間取りや炕の様式を残していると考えられる。炕は南側に一つあるだけで、高さも大人の膝ぐらいある。古い家とはいえ、さすがに炕席はなく、ビニール地となっている。竈は炕が小さいということもあるが、鍋が一つ置けるだけである。

村内にあった小商店（漢族）

【図 4】【写真 18—19】

図の如く、炕は一人一人がやっと横になれる大きさで、店主はここで寝泊まりしているという。炕の高さは四〇センチほどで、

セメントで固めているため、特に「炕沿」というものはない。炕は朝五時に一度焚くだけだという。但し冬の間は寒いのでずっと炊き続けるという。燃料は、冬は火力が強く長持ちする石炭、夏は薪とのことであった。

楊天奎氏宅（漢族）【図5】【写真

20—25】

とある家の前で老人らがひなたぼっこをしながら雑談しているので、話しかけ、炕を見せていただきたい旨を話すと、こころよく案内してくれ、結局三軒の家をみる事ができた。

最初の家が楊天奎氏宅（漢族）である。

図の如く、楊天奎氏宅は漢族でありながら、子細に観察すると、いくつかの点で朝鮮族の影響を受けており、興味深い事例といえる。一九八七—八八年に建てたということで、その当時すでに朝鮮族の影響を受けていたことが分かる。

影響の一つは、右側の炕がとりわけそうであるが、炕の面積が広くな

図4 図們市長安鎮長青村
村内にあった小商店（漢族）

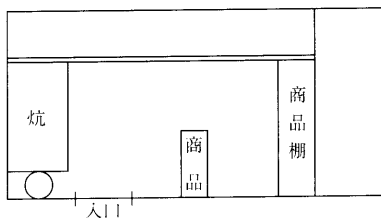


写真 18 小商店の入り口



写真 19 一人が横になれる炕

図5 図們市長安鎮長青村
楊天奎氏（漢族）

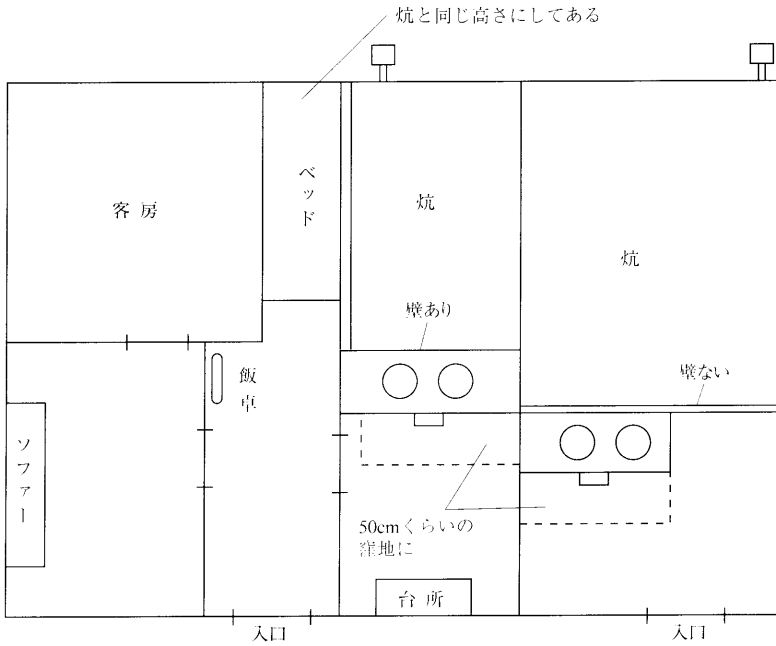


写真21 右側の部屋の電と炕
壁もなく朝鮮族の様式に近い



写真20 楊天奎氏宅（漢族）の前
にて

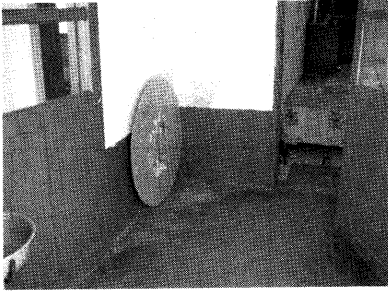


写真 23 入り口から入ったところ
左側のドアが客間へ、正面のドアが
漢族式の炕の部屋に通じる 丸い飯
卓がたてかけてある



写真 22 右側の部屋の竈の焚き口
朝鮮族のように窪地になっている



写真 25 漢族式の炕の竈 炕
の部屋とに壁があるが、鍋は
二つで、焚き口が窪地になっ
ている



写真 24 漢族式の炕の部屋で
昼寝をしている親子 炕の左
側にベッドをおいて部屋一面
に床が広がるようにしている

っており、且つ、炕の高さが伝統的な漢族のものよりも低くなっている（地面から二〇数センチ）点である。しかも右側の炕は竈と炕との間に壁がない。これは明らかに朝鮮族式であるが、朝鮮族の炕のように、竈と炕との高さがまったく同一ではなく、炕の方が一〇数センチほど高くなっている。さらに朝鮮族式を思わせるのは、竈の焚き口が五〇センチほど低い窪みになっている点である。但し、朝鮮族のように窪みを板で被うことはしていない（しようとしてもできない構造になっている）。

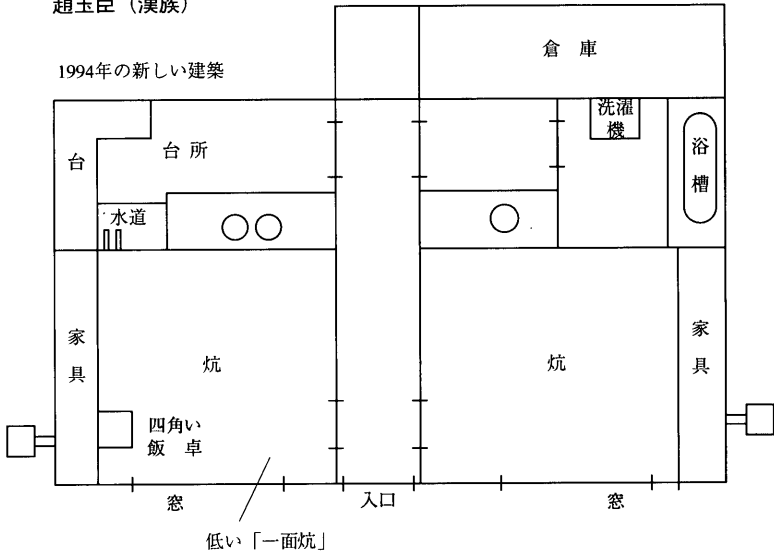
その隣の炕は小さめで、竈と炕の間に壁があり、漢族式であるが、焚き口はやはり窪みになっている。さらに面白いのは、炕の横の空間（炕沿のある側、写真の如く、炕沿にはタイルが貼られている）に炕と同じ高さの木製のベッドを置いていることである。一見すると隣の部屋のように広い炕が一面に広がっているかのように見える。この結果、この家では炕沿に腰掛けるということをせず、炕に上がるか否かの選択しかないことになる。また、竈には二つとも、二つの焚き口があり、これも朝鮮族式といえる。

飯卓は、他の家と同様、丸い折りたたみ式のものगतたんで壁に立て掛けてあった。

趙玉臣宅（漢族）【図6】【写真26—31】

続いて、趙夫人がうちの炕を見に来ないかと、近くの自宅まで案内してくれた。一九九四年に新築した家でまだ新しい。趙氏宅は漢族でありながら、楊氏宅よりもさらに朝鮮族式の影響が色濃くみえる。しかも新築ということ、間取りのデザインも今までに見たことのない斬新なものであった。入り口を入ると、細長い廊下がつづく。手前側に、左右の炕のある部屋へのドアがあり、廊下の奥にいくと、竈のある部屋に達する。左側が台所、右側が浴室兼洗濯場となっている。更にその奥に倉庫がある。

図 6 図們市長安鎮長青村
趙玉臣（漢族）



朝鮮族式の影響は、二つの部屋とも、炕が部屋一面に広がっている点である。従って炕浴もなく、炕浴に腰掛けるということもできない。もつとも、炕のある部屋と竈の間には壁で仕切られており、完全に朝鮮族式というわけではない。竈も台所のは二つの焚き口があるが、もう一つは一つの焚き口しかない。また竈は地面よりも四〇センチほど高い位置に作られており、楊氏宅のように焚き口が窪地になっているわけではない。竈側は完全に漢族の様式といつてよい。

また農村の家でこのような浴槽を作りつけて置いてるのは初めて見た。新築だからであろう。倉庫はおそらく後から付け足したのだろう。この倉庫を除き、部屋や台所などは、漢族ながら、朝鮮族のように極めて清潔できれいに保たれている。これには新築ということも理由の一つとして考えられるが、朝鮮族式の炕で生活していると、靴を脱いで部屋に上がる生活が多いせいとか、清潔に保つという点でも朝鮮族の影響を受けるようである。



写真 27 左側の部屋の大きな炕

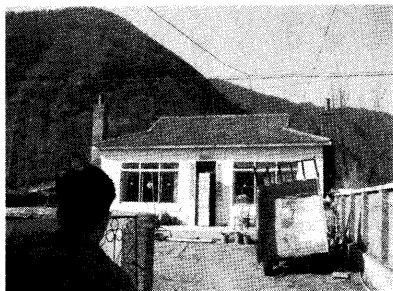


写真 26 趙玉臣宅（漢族）の全景



写真 29 台所 タイル張りできれいに保たれている

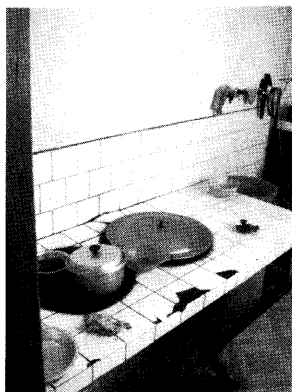


写真 28 左側の部屋の大きな炕の竈 鍋が二つある

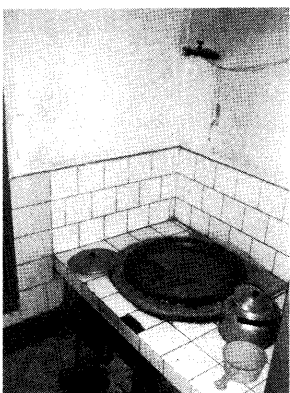


写真 31 右側の部屋の炕の竈 こちらは鍋が一つだけとなっている



写真 30 右側の部屋の炕

趙氏の案内してくれた朝鮮族宅【図7】〔写真32-36〕

この村での伝統的な朝鮮族の炕を見てみたい旨を話したら、趙氏が村はずれにある、友人の家を案内してくれた。

長屋の右半分が友人宅で、訊ねたとき、友人は炕の上で昼寝中であったが、快く室内を見せてくれた。図の如く、床一面の広い炕と、竈の焚き口が窪地になっていて板で蓋をしてあり、確かに伝統的な朝鮮族の炕であった。しかも炕と竈の間には壁もなく、高さもまったく同一である。竈に二つの鍋を置ける点も朝鮮族式である。当然、朝鮮族なので室内は清潔に保たれている。

竈の焚き口が窪地になっていているのは、們市紅光郷下嘎村の朝鮮族宅でも目にしたが、もう一つ実際に使っている方が分からなかった。それを質すと、竈の焚き口の窪地は、竈を焚くときに板をはずして中に入り、しゃがんで焚くのだという。実際に趙氏が中に入り、その動作を再現してくれた。中には紙や薪などが置いてあり、物置

図7 們市紅光郷下嘎村 某氏（朝鮮族）

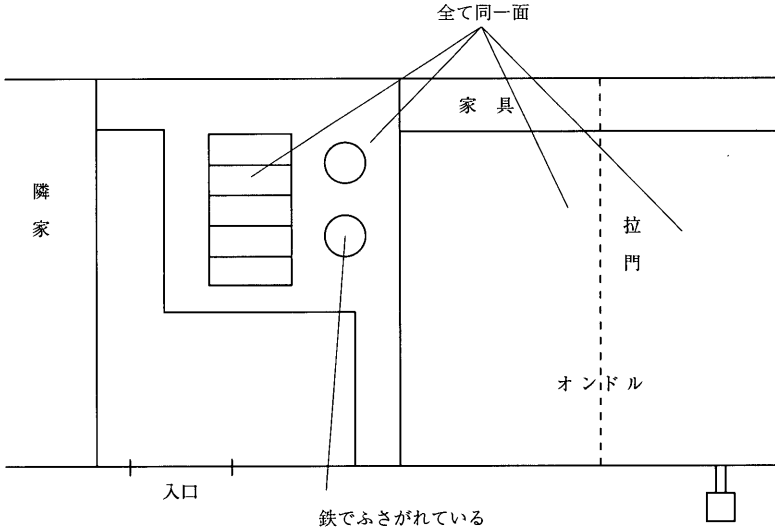




写真 32 趙氏の案内してくれた朝鮮族宅（長屋の右半分）の全景

にもなっている。使わないときには板で蓋をする。板の上に乗って何かをするのではないが、その上を歩いて地面に降りることはできる。そして何よりも、炕と竈の部分、同じ高さになるので開放感があるし、焚いている間、蓋をすれば煙が室内に漏れることも多少防げる（但し、板の密封性はまったくないので、これはあくまで推測であ

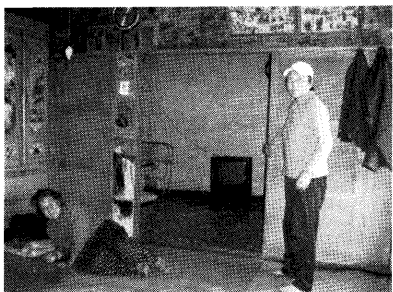


写真 34 「拉門」を開けたところ

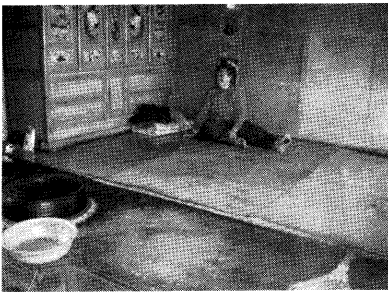


写真 33 入り口側から見た台所と竈の空間（これが後述する「鼎厨間」と、炕のある部屋。訪ねたとき、友人は炕の上で昼寝をしていた。奥にあるのが「拉門」。

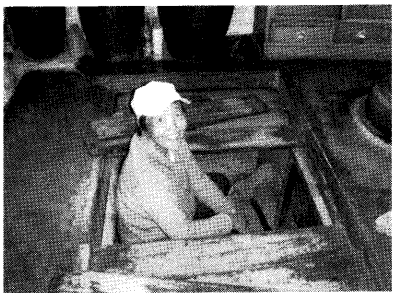


写真 36 焚き口に降りて、火を焚く様子を再現してくれているところ



写真 35 竈の焚き口に覆われている板を取り外したところ

るが) など、きわめて合理的な構造になっているといえよう。

もう一つ、この事例で興味深かったのは、炕の部屋を二つに仕切る、「拉門」とよばれるふすまのようなものがあり、しかもそれが実際に使われていた点であった。かつて、遼寧省新賓県満族自治県の農村調査をした際、朝鮮族の家でもはや「拉門」はなく、かつてこの位置にあったというのを聞いたただけだったので、実際に使っているところを見たのはこれが初めてであった。(この「拉門」はその後、延吉市内の「火炕楼」や、龍井市近郊の農村でもみるこができた)

(三) 龍井市光新郷偉心村

龍井市光新郷偉心村は龍井市の郊外にあり、延吉市とを結ぶ高速道路沿いにある集落である。偉心村は、朝鮮族が多数を占め、漢族は「少数民族」とのことであった。朝鮮族宅一軒、漢族宅一軒を見せてもらうことができた。

金善真氏宅 (朝鮮族) 【図 8】 【写真 37—43】

金氏宅は完全に伝統的な朝鮮族の様式の炕であった。炕のある部屋には拉門があり、その部屋と竈の高さが同一で、その間に敷居もなく、焚き口は窪みになってその上に板をかぶせている。竈の鍋も二つある。

訪ねたときに昼寝をしていた金氏は、今年八二歳で、一六歳の時に朝鮮半島の南部(慶尚北道)からやってきたという。拉門の奥の部屋は朝鮮語で、「ウツパン」、手前の部屋は「アンパン」といい、「炕のことは「トゥグル」と言うという。「アンパン」には、円形の「飯卓」が二つ置いてあった。

図8 龍井市光新郷偉心村
朝鮮族宅

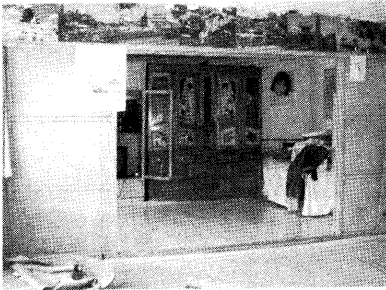
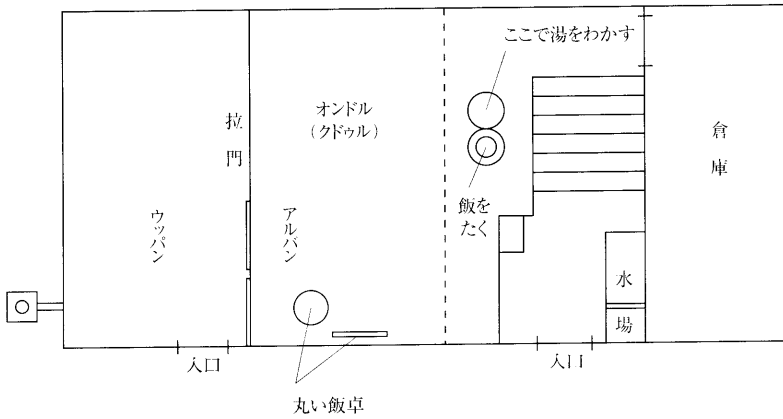


写真38 電側からみた炕の部屋 拉門を挟んで奥の部屋がウツパン、手前の部屋がアンパン



写真37 金善真氏宅（朝鮮族）の全景

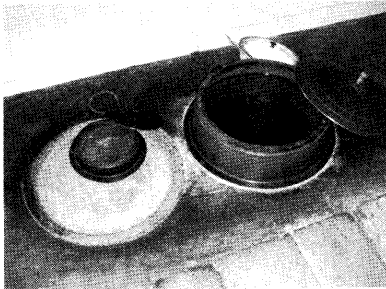


写真40 二つの鍋 右側で湯を沸かし、左側で炊事する

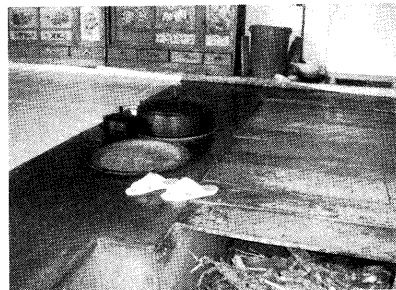


写真39 竈と台所の空間（「鼎厨間」）

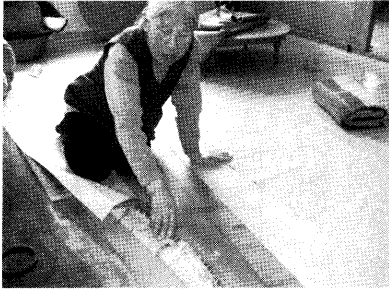


写真 42 炕上のビニール地をめくってその下を見せてくれたところ奥に丸い飯卓が見える

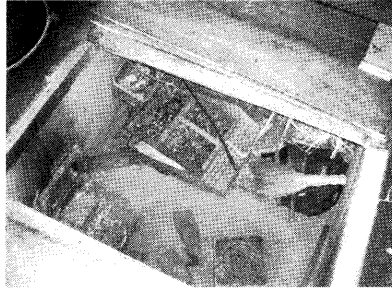


写真 41 焚き口の板をめくったところ 炭や燃料、小さな椅子などが置いてある

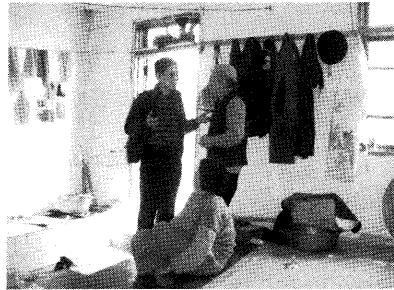


写真 43 炕のある部屋側から台所と入り口を見たところ 訪ねてきていた女性が台所のセメントの上のって座っている

相氏宅（漢族）【図 9】【写真 44—47】

この村での漢族の炕も見えてみたいと思い、金氏宅に昼寝に来ていた、相氏（漢族）の家も見せてもらうことにした。すぐ隣近所であった。

一九九一年に建てたという家は、漢族ながらもまるで朝鮮族のように清潔であった。訪ねたときはご主人が炕の上で昼寝をしていた。

様式としては漢族の炕であるが、朝鮮族の多い村落ということと、比較的新しく建てたということで、この家の炕は朝鮮族の影響を受けていた。それは左

燃料は石炭のほか、木や玉米稈（トウモロコシの茎）などであるという。二つある鍋のうち、右側はお湯を沸かすもので、左側は炊飯などに使うという。このお宅で実際に板をはがして焚き口に坐らせてもらった。窪みは燃料などの置き場所になっており、中には小さな椅子とサンダルがあった。焚き口は写真の如く、かなり下の方であった。

図9 龍井市新郷偉心村
金宅に遊びにきていた女性の家

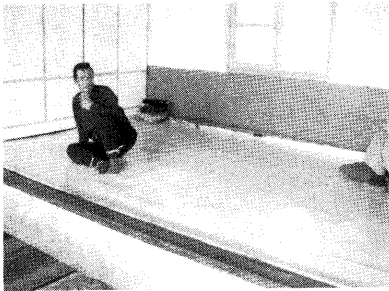
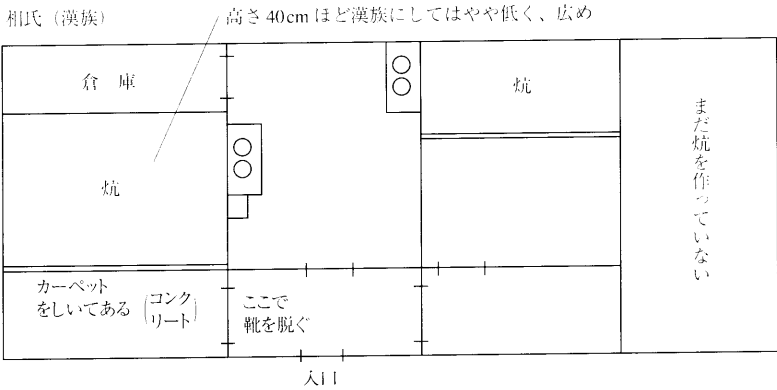


写真45 左側にある大きな炕 漢族にしては広く、低い 木製の炕浴がみえる

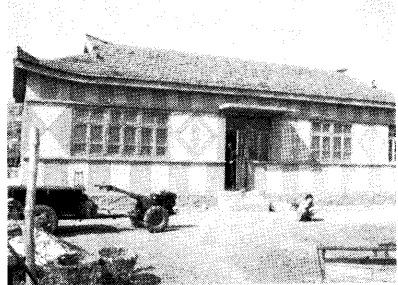


写真44 相氏宅（漢族）の全景



写真47 左側にある大きな炕の竈 焚き口は二つで、朝鮮族式の鍋が二つみえる

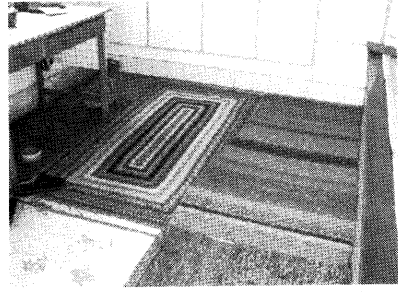


写真46 炕の向かい側の地面には色鮮やかな絨毯が敷かれ、夏はここで過ごす

側の炕が、漢族にしてはやや低いのと、面積が大きいことである。また木製の「炕沿」は今回の調査を通して初めて見た。もう一つの影響は、左側の炕の前のコンクリート地の部分に、色鮮やかな絨毯を四枚、床一面に敷き詰めることである。このような例も初めてみた。当然、炕に上がるときではなく、この部屋に入るときに靴を脱ぐ。絨毯について聞くと、夏は絨毯の上に座るのだという。また、竈の鍋も二つあり、朝鮮族式といえるが、これはほとんどの漢族の家でみられる普遍的な影響といえる。

(四) 延吉市内の民家における炕

これまで、農村部の炕をみてきたが、ここで市内の家屋での炕がどうなっているかもみてみたい。大きく分けて「平房」(一戸建ての平屋)と「火炕楼」(四、五階建ての集合住宅)とがある。かつて調査した、遼寧省新賓県満族自治県の県城では、「楼房」が多く、「平房」の炕はそれほど見ることができなかったが、延吉市内にはちよと裏通りに入ると多数の「平房」があり、いくつかの炕を見せてもらうことができた。基本的には都市部も農村部も、炕の構造に関しては大差がないことが分かった。また、「火炕楼」の存在を知り、これを実際に見ることができたのは大きな収穫であった。

(a) 大宇飯店の向かいにある「平房」街にて

朝鮮族宅【図10】【写真48—51】

図 10 大宇飯店前の平房街にあった朝鮮族の平房（長屋の左半分）

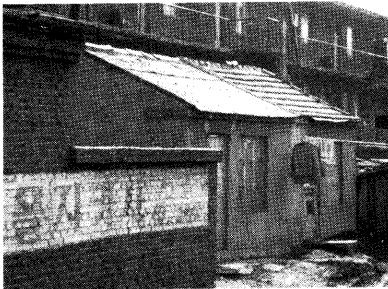
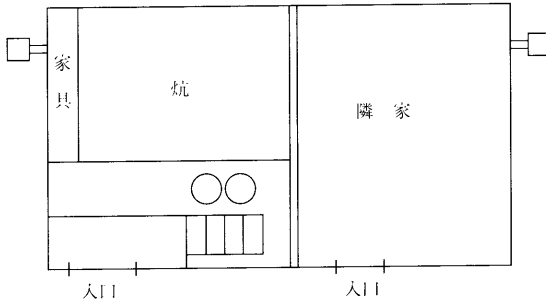


写真 49 朝鮮族宅（訪ねたお宅は左半分）の全景



写真 48 大宇飯店の向かいにある「平房」街

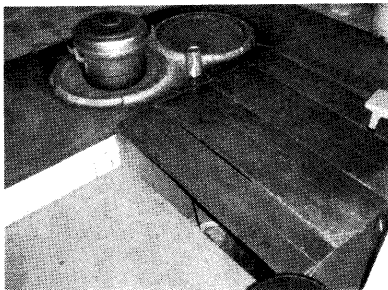


写真 51 二つの竈と焚き口の板のおおい（「鼎厨間」に相当）

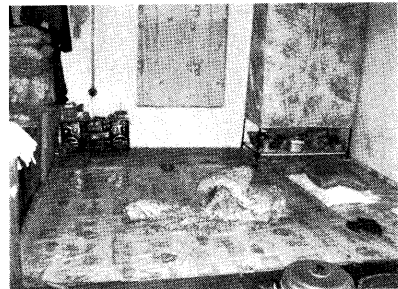


写真 50 炕の部屋

このお宅は長屋になっており、左半分の一間に住んでいる。都市部の住宅の場合、農村よりは部屋が狭くなるか、部屋数が少なくなるが、炕そのものは農村で見たのとまったく同じ様式であった。即ち、部屋一面の炕、炕と竈の間に仕切がなく、高さも同じで、竈には二つの鍋があり、焚き口も窪地になっていて、その上に蓋がしてある。部屋には昼寝をしていたのか、蒲団が敷いてあるが、朝鮮族だけあって部屋の中は非常にきれいに保たれていた。都市部でも、「オンドル」とは呼ばず、「クドウル」という方言を使うという。

55 朝鮮族宅を借りている漢族【図11】【写真52】

朝鮮人街に、漢族の習慣である「春聯」が門に貼ってあったので、家の前で野菜を売っていた若い夫婦に話しかけると、自分たちは漢族で、この家は借りているのだという。炕についてたずねると、初めは漢族も朝鮮族も一緒だと答えていたが、実際に見せてもらうと、多少の差違がある。一見すると、焚き口が窪みになっていてその上に板をかぶせてるので、朝鮮族の様式のようにみえるが、よく見ると、窪みを蓋している板と竈の高さとに一五センチほど

図 11 大宇飯店前の平房街にあった漢族の住む平房

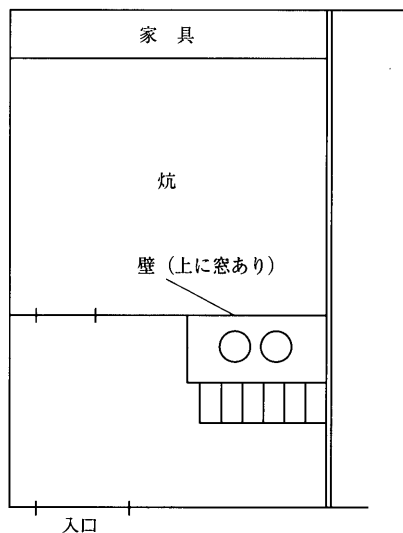




写真 53 炕の部屋 あまりきれいとはいえない



写真 52 「平房」街にあった漢族宅
春聯ですぐに漢族の家と分かる



写真 55 竈に段差があるが、焚き口は板の間で覆われており、朝鮮族式といえる



写真 54 炕の部屋と竈との間には壁とドアがある

の段差があること、炕の部屋と竈との間に壁があること、炕の高さも二五センチほどと高く、炕、竈、板とが朝鮮族の様式のようになつていない。この点を指摘すると、確かに朝鮮族の「地炕」とは違う、とのことであつた。

但し、こうした変則的な様式が、朝鮮族式のバリエーションの一つなのか、漢族が朝鮮族の様式を一部取り入れたものかは、結論が出せない。元の住民が漢族であれば、この家だけ漢族式に建築したとも考えられるが、朝鮮族街にあつて、その可能性は低そうだし、今住んでいる人が借りてから改修したようにも見えない。

なお、古い借家ということもあろうが、炕も部屋も乱雑で汚かつた。漢族でも既に述べたように朝鮮族同様にきれいに保っている例もあるが、概して漢族の家は朝

鮮族に比べて汚いことが多い。この点はよく指摘されてきたことではあるが、両者の違いを目の当たりにして、どうしてこのような差違が生じるのか、やはりこれは究明するに値する問題ではないかと思う。

朝鮮族の商店【図12】【写真56—57】

同じ朝鮮人街にあった小さな商店も見せてもらった。【図12】の例と同様、一見すると朝鮮族式ではあるが、竈と窪みを被っている板との間に一五センチほどの段差があり、竈と炕の部屋との間にも仕切がある。この点を主人に質すと、これは伝統的な「地炕」とはいえないが、やはり朝鮮族式の炕と違ってよい、とのことであった。炕と竈との仕切は、商店に改修する際につけたようであった。漢族式の炕との識別方法について聞くと、漢族式のは窪地を被う板がなく、炕ももっと高いということであった。

図12 大宇飯店前の平房街
朝鮮族の商店
15cm ほどの段差あり

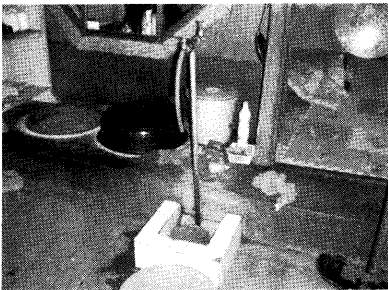
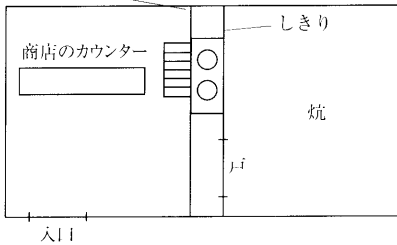


写真57 仕切で区切られた炕の部屋と、竈 これも段差があるが、焚き口が板で覆われており、朝鮮族式といえる



写真56 「平房」街にあった小商店の内部

（b）通りに面した「火炕楼」にて

「火炕楼」の存在は延吉にきて初めて知った。「火炕楼」というのは四、五階建ての建物にもかかわらず、各階の各部屋にそれぞれ炕とその焚き口があるというものである。これと対比される言葉は「暖気楼」で、こちらの方は温水パイプを各部屋の壁際に設置した、セントラル・ヒーティングとなっている。新しい建築はすべて「暖気楼」になっており、「火炕楼」は古い建築に多いという。【写真 58

59

「火炕楼」と「暖気楼」との見分け方は、建物の古さのみならず、煙突の形状を見れば一目瞭然である。「暖気楼」の煙突は炊事用の排気口のようなもので、屋根の上に小さく出ているだけであるのに対し、「火炕楼」の煙突は、レンガ造りの大きな四角形の煙突の中にさらに丸いパイプ状の煙突が数本突き出ている。これは煙突の枠組みは共有はしているものの、各家ごとに煙突をつけているためである。完全な共有にすると、焚く家と焚かない家とがあった場合など、煙の逆流が起きて不便だからとのこと。

煙突の形状をみながら、大宇飯店前の「火炕楼」のいくつかをたずねてみた。しかし一階は商店になっているところが多く、なかなか見せてくれなかった。数



写真 59 「火炕楼」の煙突。四角い枠の中に家ごとの丸い煙突がみえる

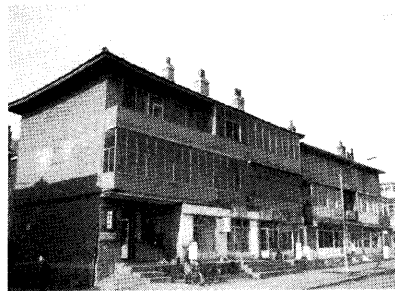


写真 58 大宇飯店の向かいにあった「火炕楼」の全景

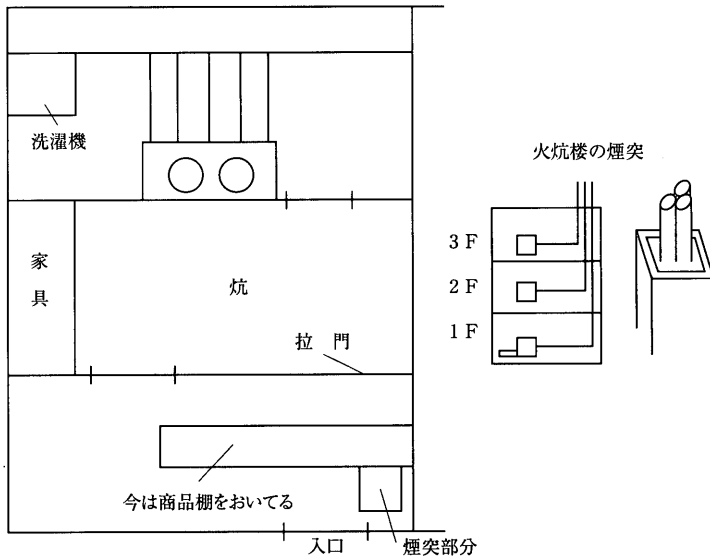
軒まわってやっと、朝鮮族の羌氏がなんとか室内を見せてくれた。

63 羌氏宅（朝鮮族）の「火炕楼」【図13】【写真60】

この建物は一九八〇年代に建てたもので、来年（二〇〇四年）には取り壊す予定だという。あと数十年で、市内から「火炕楼」はすべて姿を消すであろうとのことであった。

建築当初から一階部分が商店であったかのかは聞きそびれてしまったが、一階部分に明らかに改修の跡があるので、恐らく後になって商店に改修したものと考えられる。その傍証として、奥の炕のある部屋と表の商店になっているスペースとの間に、「拉門」が今も残っている。当初は二間になっていた部屋の道路側を商店に改修したのであろう。商店の床はコンクリートの打ちっ放しになっているが、ここにも暖房がはいることになる。

図 13 飯店向いの火炕楼
火炕楼 1F の商店 羌氏（朝鮮族）



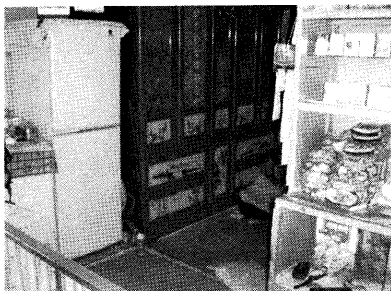


写真 61 店のカウンター側から炕のある部屋をみたところ



写真 60 「火炕楼」の羌氏宅。一階部分を商店に改造してる

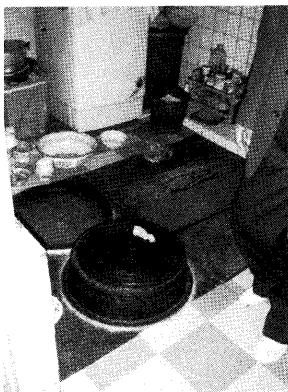


写真 63 二つの鍋と焚き口をおおう板 炕のある部屋との間に壁があるものの、紛れもない朝鮮族式の竈であった



写真 62 炕のある部屋に立つ羌氏 右側に拉門がみえる 奥の扉の向こう側に台所がある

奥の竈も見せていただいた

が、二つの鍋、焚き口の窪みとそれを被う板、竈と炕の高さが同一など、完全な朝鮮族式の炕であった。

炕の燃料は石炭で、炕はあくまで暖を取るためにだけ焚き、夏は焚かないという。

日々の炊事は電気やガスで行うという。

(五) その他

図們市内の土産店 [図 14]

【写真 64—65】

朝鮮との国境にかかる橋のたもとにある小さな土産店にはいったところ、店の奥に小

図 14 図們市 北朝鮮との国境付近にある土産屋

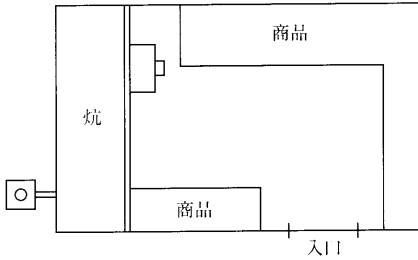


写真 65 店内に設けてあった小さな炕とその上に平座してくつろいでいる客



写真 64 図們市内の土産店の全景
左側に煙突がみえる 店主は朝鮮族

小さな炕があったので写真を撮らせてもらった。ここで寝泊まりをしているとは考えられないが、冬の寒い間、暖を取っているのだろう。写真にあるとおり、炕は漢族式のように高くなっているが、これは部屋が狭く売店という形式のため、こうした炕を採用したものである。店主は朝鮮族の人であった。

大宇飯店付近にあった「茶座」にて
【写真 66—67】

延吉市内には至る所に「茶座」という看板を目にする。これは韓国式の喫茶店であるが、内装は韓国のものとは多少異なるようである。大宇飯店付近にあった「茶座」に入ってみた。この建物自体は比較的新しく、「暖気楼」である。店は一階にあり、中は複数の小さな個室になっていた。ソファアの部屋も一つあったが、他は全て平座するようになっていた。



写真 66 大宇飯店の近くにあった「茶座」と呼ばれる喫茶店の看板と入り口。「暖気楼」の一階にあった

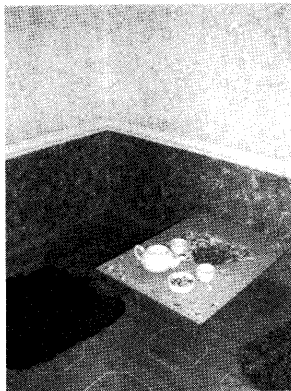


写真 67 茶座の内部 このように個室になっていて、客は平座する

「暖気楼」は確かにこぎれいで快適ではある。それにしても喫茶店内でも平座する習慣が維持されている点が興味深かった。

大宇飯店前の「平房」街にあった石炭店にて

大宇飯店前の「平房」街を歩いていると、いくつかの石炭店を目にした。石炭店は「煤店」「煤場」など書かれた簡単な看板を掲げているが、店先に石炭を山積みしてあるのですぐわかる。【写真 68】

その中の一つの店で話を聞いた。【写真 69—70】この店で売っているの石炭は、延辺朝鮮族自治州の琿春産と黒竜江省の老黒山産の二種類であった。石炭の場合、斤単位で売るのはなく、店先にあつたりヤカーに積んである大きな木の箱に満杯入れて五〇元ということであった。ちなみにこの箱にはおよそ七〇〇斤ほど入るといふ。購買者はリヤカーごと借りて家へ運ぶわけである。琿春産は煙が多く出るのに対し、老黒山産は重たく質が良いという。値段も琿春産

より高いという。

購買されていく石炭はすべて炕で暖をとるために焚くもので、炊事に使うことはないという。炊事は電気やプロパンガスを使う。なお、石炭の取れないところでは、練炭を炕でたく所もあるという。

延吉に限らず、東北地方では、大都市や地方都市を問わず、冬の間は石炭で暖をとるため、スモッグが凄く、空気

も汚染されている。とくに寒い冬の午後ともなると、はつきりと煤煙の層が見えるほどである。これだけの家々が石炭で暖をとっていたら当然であるが、環境問題を考える上では、今後解決していかなければならない問題であろう。

【写真71】

朝鮮半島の民家の類型と中国の朝鮮族の民家

朝鮮半島の民家と炕（オンドル）

朝鮮族、とりわけ延辺朝鮮族の炕を問題にする際には、どうしても朝鮮半島における民家と炕の構造について押さ



写真 68 市内でよくみかける石炭店

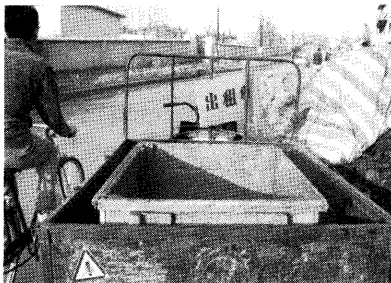


写真 70 この木の箱一杯で 50 元



写真 69 話を伺った石炭店の店先



写真 71 夕暮れ時の市内のスモッグ

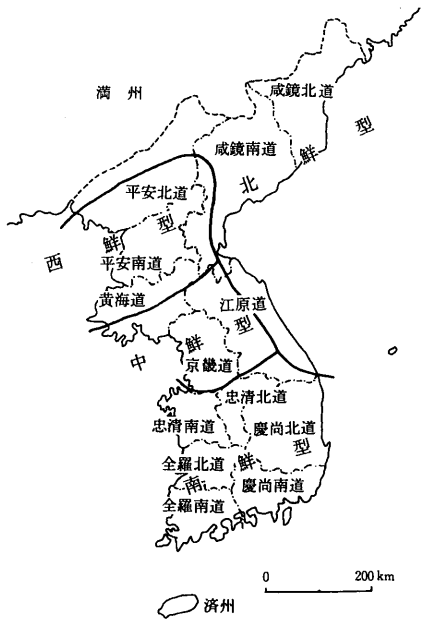
えておく必要がある。幸い、これに関しては、張保雄著『韓国の民家』（佐々木史郎訳一九八九）という包括的な專著がある。以下、本書をもとに朝鮮半島の民家と炕について概略を整理してみたい。朝鮮半島における民家の類型化の研究は、日本人研究者を含めて一九二〇年代から行われてきた。

古典的な分類としては、岩槻善之（二九二四）が、**【図15】**の如く、間取りを指標として、一、北鮮型、二、京城型、三、中鮮型、四、西鮮型、五、南鮮型の五つに分類している。北鮮型は田の字形の間取りをなし、小農家では牛舎と厨房を一緒に設けその境を壁で仕切らない。必ず大庁（板の間）がある。京城型は必ずし字形に屈曲させ、一字型は避ける。中鮮型は、西鮮型とほぼ同じであるが、大庁を設けないものもある。西鮮型は一字型をなし、どんな大邸宅にも大庁を設けない。南鮮型は一字型で、大庁は必ず設ける。

これに対し張保雄は、先駆的な研究として評価しつつも、資料の不足から、西鮮型と南鮮型の違いを大庁の有無に求めていることと、西鮮型にL字型がないとしたのは誤りで、さらに京城型と中鮮型は同一類型として扱われるべきであったとしている。

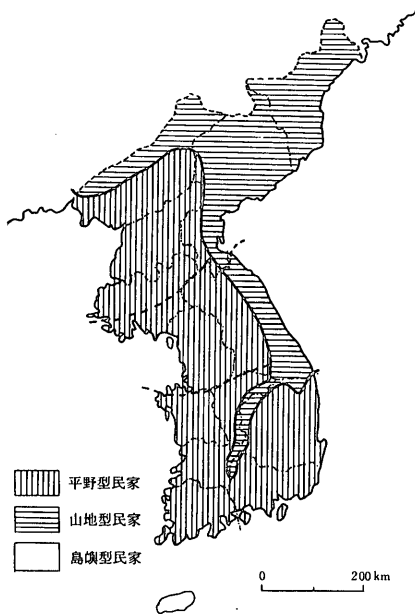
新しいところでは、張保雄が一九七四の論文で、従来とは違った視点から、一、山地型、二、平野型、三、島嶼型の三つに分類している。**【図16】**

図15 民家型の分類（岩槻善之、1924年）



張保雄 1989 より

図 16 民家型の分類 (張保雄, 1974 年)



ば一致している。

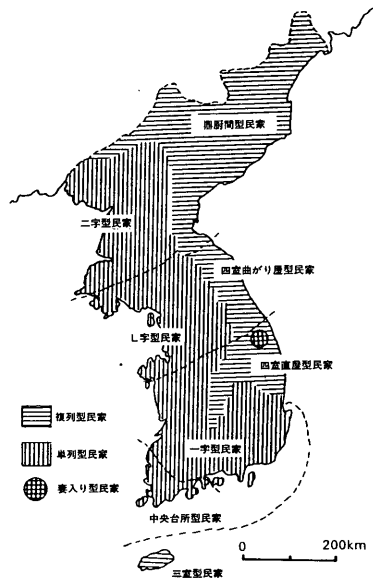
張保雄は二つの類型の中で、さらなる細分化を行っている。池春相の論文によると、張保雄は一九九六年に『韓国家の地域的展開』という本のなかで、さらに自説に修正を加えているようである。本書を入手することはできなかつたが、その最新版を再録したい。(【図17】参照)

本稿では、民家の細かな分類には立ち入らないが、延辺朝鮮族の主要な出身地である咸鏡南北道の類型を見ておきたい。朝鮮半島の東北部(咸鏡南北道)に主に分布しているのは、「複列型民家」であり、その中にはさらに「三室型」「四室型」「五室型」に細分化される。その完成型ともいえる「五室型民家」をみてみたい。(【図18】参照) 複列五室

参照) 山地型は複列の田字型で厳寒の冬を過ごすのに便利なように作られた閉鎖的な家屋構造をもっている。平野型は、単列の縮変型で、一字型、し字形、口字型、コ字型、二字型などがある。島嶼型は済州島でみられるもので、北方の要素に南方の要素が混ざり合ったものである。これに対し、張保雄はその後、自身の旧説を修正する形で、棟木の下に部屋を一列に配置する「単列型民家」(片通式民家)と、二列に配置する「複列型民家」(両通式民家)とに大別した。後者の「複列型民家」の分布は先の分類でいうと山地型の分布とほ

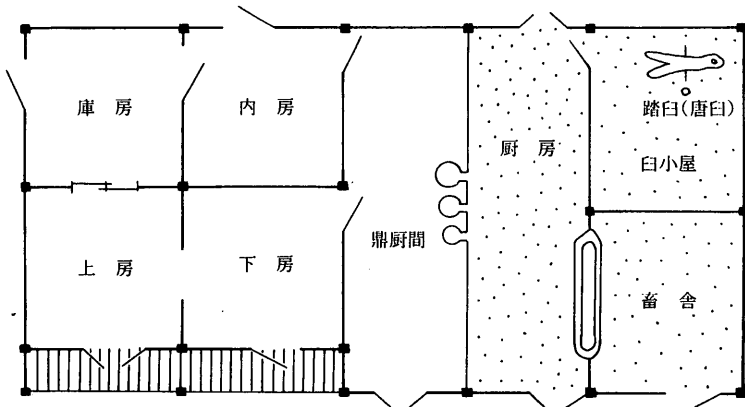
型民家は、一般に厨房と部屋の中に「鼎厨間（チョンジュカン）」と呼ばれる広いオンドル部分がある。鼎厨間と厨房との間には壁がなかったが、だんだんと壁が作られるようになってきている。この鼎厨間は厨房につながっているため、最も暖かい部屋であり、冬には寝室としても用いられる。普段は食堂としても用いられるほか、主婦の親しい友人を接待する空間ともなるなど、最も多目的に使用される空間であるという。

図 17 朝鮮半島における民家類型の分布
(張保雄『韓国家の地域的展開』)



池春相 1999 より

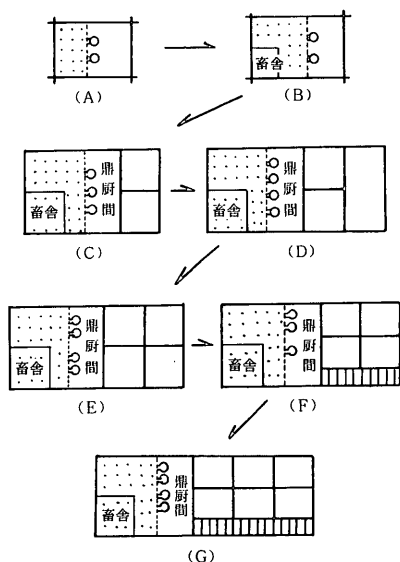
図 18



咸鏡南道の複列五室型民家(野村孝文, 1933年)

張保雄 1989 より

図 19 複列五室型民家の間取りの進化



張保雄 1989 より

もつとも複列五室型家屋は当初から存在したのではなく、いわば最終発展型といえる。張保雄は、複列五室型家屋が形成される発展過程を図式化している。(図19)参照) (A) は最も初期の移動農耕時期の単純な間取りで、厨房と一間のオンドル部屋があるだけで、その間には壁がない。この形式は中国東北地方の炕に極めてよく似ている。(B) は厨房内に畜舎が発生したものの。(C) は定着的な三室型の民家で、「鼎厨間」が発生し、複列型の特性が現れはじめている。「鼎厨間」に接続して「前房」と「後房」とがある。(D) はこれに広い部屋が増設されたもの。(E) は複列五室型の特性が完成したもので、(D) を経ずに (C) から直接進化することもある。(F) は五室型に縁側が発生したものである。

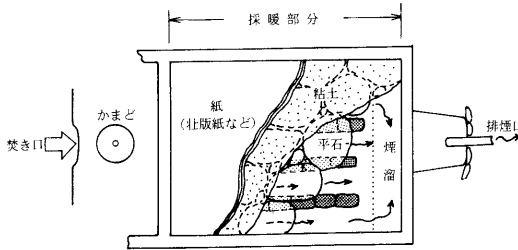
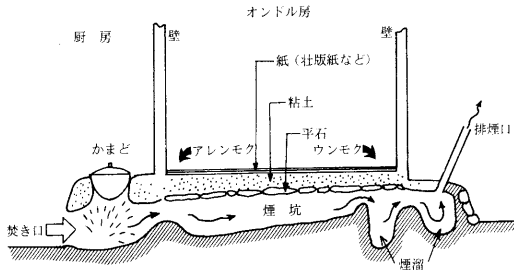
なお、ここで張保雄のオンドルに関する記述を紹介しておきたい。オンドル(温突)の起源と伝播の歴史については明確に究明されていないが、中国東北部の民家にはオンドルに似た炕があり、韓国の五室型民家にみられる「鼎厨間」はこの炕と似たものと考えられる。朝鮮のオンドルが先に発生したのか、漢族の炕がオンドルに先行したものは分かっている。但し暖房方法が似ているので、起源を同じくしながら、地域的に変型して、オンドルと炕に分化したものと考えられる、としている。

『旧唐書』卷一九九の高麗条によれば、「冬月皆作長炕下燃温火以取暖（冬季は皆長炕を作り、その下で火を焚いて暖を取る）」という記述があり、高句麗では炕が使われていたことが分かる。同様の記述は『唐書』卷二二〇にもみえる。女真族も炕をもっていたという記録がある。即ち、『三朝北盟会編』卷三の女真族の項には「環屋為土床熾火其下與寢食起居其上謂之炕以取其暖（屋内の壁際に丸く土床部分を作って下で火を焚き、その上で寢食、起居するが、これを炕という）」と記されている。これらの記述によると、三国時代の朝鮮半島でみると、北部の高句麗には長炕というオンドル設備があつたが、新羅や百済のオンドルについては何らの記録がない。『唐書』卷二二〇の新羅条に「冬則作竈堂中（冬季になると屋内に竈をのせられる竈を作つた）」とみえる。これらから、張保雄は、朝鮮半島の中南部を占めていた新羅と百済へのオンドルの伝播については不明としている。その後、中世の高麗時代には朝鮮半島南部までオンドルが拡散し、さらに近世に至つて、済州島にまで伝播した、としている。

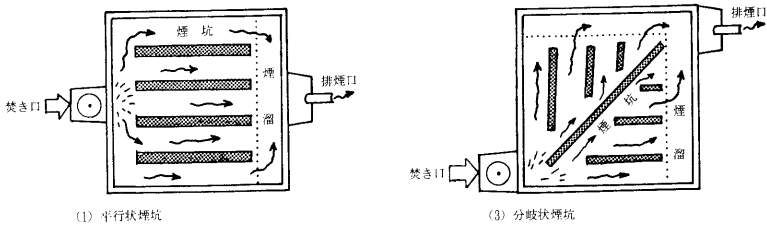
炕の歴史は非常に興味深い問題であるが、張保雄の述べている如く、その起源や伝播の詳細はよく分かつていないのが現状である。その意味で、漢族の炕が 複列五室型家屋の発展過程の初期にみられるものと似ているという指摘は注目される。

張保雄は現在のオンドルについても、その構造を説明している。オンドルを築くには、まず基壇の上部から数条の溝を掘り込むか、広く面状に掘り込んだ底に石を列状に並べるなどして、煙の流れるすじ道（煙坑）を作る。煙坑の平面形はに、平行状、放射状、分岐状などがある。（図20）参照）次にこの煙坑の上に平石で覆い、その上に粘度を塗る。さらにその上にザラ紙などを貼り、最後に牡版紙（チャンパンジ）と呼ばれる油紙を貼って仕上げをするが、かつては土塗りをした上に紙を貼らずに、アンペラを敷いてしようすることもあつた、という。このアンペラは、漢

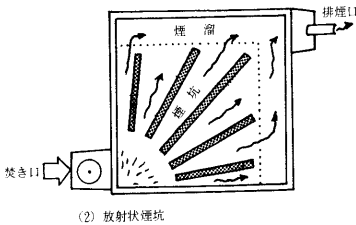
図 20 オンドルの内部構造



図A オンドルの構造(模式図) 上:断面図, 下:平面図



図B オンドル煙坑のいろいろ



張保雄 1989 より

族のいう「炕席」に相当しよう。

室外の焚き口から送り込まれた熱煙は、煙坑を通つて一旦、煙溜め（ケジャリ）に落ちてから外に排出されるが、その間に床全体ができるだけ均等かつ穏やかに暖まるように床の厚さや煙坑の配置を決める必要がある。床が薄すぎたり、煙のまわり具合が悪かったりすると、焚き口の付近だけが熱くなつてしまふ。オンドル床のうち、焚き口に近い部分を「アレンモク」、遠い部分を「ウンモク」とよぶ。直訳すれば、前者が「下頸部」、後者が「上頸部」となる。前者の方が暖かく、上席である。オンドルの焚き口は厨房内の炊事用の竈を兼ねることがあるが、部屋数が多くなつたり、間に板間が置かれたりすると、厨房以外にも焚き口を分散させて設けることになる。通常、焚き口から一方向に送熱できる範囲は、部屋数にして二間程度である。

オンドル房の出入り口は、夏季の通風も考慮して、前後に設けることが多いが、開口面積は小さくして、冬季の暖房効率を高めている。天井も二メートル前後と低い。建具は障子張りで、両開きまたは片開きの開き戸が多いが、引き戸も若干みられる。

最後に、部屋の名称を整理しておきたい。民家の床構造は、土間、板間、オンドルの三つに大別される。土間以外は履き物を脱いで上がり、床に座る。二つのオンドル房の間に「封堂」（ボンダン）とよぶ土間を置くこともあるが、余裕があればここを板間（大庁、テチョン）にすることが多い。大庁や縁側などの板間部分は、現在、「マル」と総称されることが多い。内房（アンパン）は、家族生活の中心となる部屋で、主人夫婦と幼少の子女の寝室、主婦の居室となる。通常、厨房に隣接し、主人以外の成人男子や外部人士の出入りは制限される。同一の焚き口からオンドル部屋が二間並ぶ場合、焚き口に近い方を下房（アレツパン）、遠い方を上房（ウツパン）と呼ぶこともある。下房（アレツパン）は内房と一致することも多い。上房（ウツパン）は暖房条件が劣るので、物置部屋として用いられた

りもする。このほか、舎廊房（サランバン）と呼ばれる主人の書齋兼接客室があり、主屋から分離させて別棟に置かれることもある。越房（コノンバン）は、板間（大庁）を挟んで内房と向かい合い部屋で、離れに相当し、老人部屋は子女の寝室などに用いられる。

遼寧省新賓県での調査報告では、漢族の炕の内部構造を聞き書きで再現したが、朝鮮族の場合、基本的に同じとはいえ、炕の面積が大きいだけに、煙坑の形状に、平行状、放射状、分岐状などがあるのは本書で初めて知った。また、熱煙が煙坑を通って一旦、煙溜め（ケジャリ）に落ちてから外に排出されるというのも初めて知った。新賓県の調査ではこの点までは聞かなかったため、漢族の場合もどうかは不明である。さらに、漢族の炕の場合、数年ごとに炕を一度壊して内部を掃除することであったが、朝鮮族の場合、どうするのかという疑問が起こる。部屋一面に炕を広げているため、これを一度解体するというのは大変な作業になるからである。

中国朝鮮族の民家と炕（オンドル）

中国の朝鮮族の民家の問題に関しては、池春相の「住文化の特色―民家類型とその変容」という論文がある。池氏も張保雄らの韓国の民家の類型を踏まえた上で、東北地方全体の朝鮮族の民家について、調査資料をもとに論じている。

池氏は、まづ朝鮮半島の民家の分布を以下のように整理している。則ち、気候が温和な朝鮮半島南部の民家では、山を背に水に臨む土地柄を拠点に南向きの一の字造りが典型となっている。そして、次第に北上して寒冷地帯に及べば、中央部ではフの字・ニの字、口の字造りとなり、北朝鮮の関西地方（平安道）では並列の二の字造り、寒帯とな

る東北の咸鏡道では台所と「鼎厨間」と呼ばれるオンドル部屋とが併存する複列造りの形態となっている。そしてこのような現象は自然環境の比重が大きいとしている。

さて、東北地方の朝鮮族の民家に関しては、朴慶輝の分類（『朝鮮族民俗史研究』遼寧民族出版社一九八八）がある。朴氏はまづ「朝鮮式住宅」と「中国式住宅」の二類型をたて、前者は「鼎厨間」が中央にある咸鏡道型の両通屋を指し、後者は黒竜江省・遼寧省・延辺地区を除いた吉林省に分布する民家で、芸術的修飾要素には民族的色彩が見られるが家屋の構造形態は中国人住宅と同じだとしている。さらにこの両類型の折衷式として「半朝鮮式・半中国式住宅」を設け、それは台所間を中心に一方の部屋が純朝鮮式の平面オンドルとなっている民家としている。

これに対し池氏は、「鼎厨間」のある両通屋と「鼎厨間」のない両通屋に大別した方がより適切であるとしたうえで、自身の調査をもとに、（一）「鼎厨間」のある家、（二）「地室（ティシル）」のある家、（三）「空間（コンカン）」のある家の三つの分類を提案している。

（一）の「鼎厨間」のある家は、さらに一通屋と両通屋に細分される。延辺朝鮮族自治州の朝鮮族に見られる様式である。（二）の「地室」のある家は遼寧省の朝鮮族に多く見られるもので、台所と左右の部屋の間に壁で仕切られ、出入りの扉を経て土間やセメント塗りの「地室」と呼ばれる空間となり、この空間の一方に一メートルほどの高さの開けっ放しのオンドル部屋が設けられている。食事は、「地室」に置いたテーブルか、オンドルの上の脚の低い卓である。

この類型は、平面構成上は漢族の住宅と似ており、朴慶輝はこれを「中国式住宅」としているのに対し、池氏は、影響を受けたといえオンドル部屋の広さと機能が異なる上に名称も違っていると、中国朝鮮族の住宅の様式と見るべきであると主張している。

(三)の「空間」のある家は、黒竜江省の事例にみる。この地方では「地室」のある家型の、地室機能のなす空間を「空間」と呼んでいる。同じ空間に一メートルほどの高さで、壁仕切のないオンドル部屋が続いている。構造上は「地室」のある家型に似ているが、オンドル部屋の奥に台所や倉庫があり、そこへ行くには漢族住宅の走廊と同様に「復道（ポクト）」を通らねばならない点が異なる。

以上をまとめて、池氏は次のように結論づけている。中国の東北地方に居住する朝鮮族は、咸鏡道からは図們江を渡って、平安道からは鴨緑江を渡ってそのまま定着した人々と、一九三八年頃、日本政府による満州開拓の名目で、江原、京畿、忠清、慶尚、金羅の各道から集団で移住してきた人々の子孫から成っている。従ってこれらの先代は朝鮮半島のほぼ全域からきており、村落ごとに現住地の習俗を残している。しかしながら民家に関しては、必ずしも原住地を手本とはしておらず、現地自然环境に適応した民家形態を作っているとしている。吉林省の延辺朝鮮族自治州に居住する人々は、図們江を国境として咸鏡道と隣接しており、台所と「鼎厨間」が併存する咸鏡道式の両通屋に居住しているのに、鴨緑江を境界として平安道と隣接している遼寧省の朝鮮族は、平安道民家とは平面構成がまったく異なり、漢族の家屋に類似した家に住んでいる。さらに黒龍江省に居住する朝鮮族は、大部分が集団移住の子孫でもあるにかかわらず、朝鮮半島の原住地の住宅様式とは異なり、当地の中国式住宅の影響を受けた家屋に住んでいる。また、移住後の変容過程についても次のように推測している。延辺地方の咸鏡道式両通屋の変容過程に関しては、一九三〇年代に移住してきた当時には、土間のある台所とオンドル部屋から成っていた「鼎厨間」に対して、韓国中部地方の民家と同様に壁で仕切ったり、通り間としていった。また四室造りを基本形に、次々と六室、八室に拡大していったと推測している。

「地室」のある家は、漢族式住宅を手本にしてなされたが、当初は地室がやっと履き物を脱いでオンドル部屋に上

がつていける程度のスペースしかなかったのに、生活の便から徐々に広がっていった。その結果、概観上は漢族住宅と類似してきたが、朝鮮族の場合はオンドル部屋が広く、これをよく利用するのに対し、漢族の場合は地室が広く、ここでさまざまな作業をする点が異なる。「空間」のある家は、閉鎖的な構造で、零下三〇度を下回る黒竜江省の氣候と関係があらうとしている。

調査資料の考察

張保雄および池春相の研究によって、朝鮮族全体の家屋の間取りと炕の構造、および中国に渡って以降の朝鮮族の炕の構造の変容の問題が明らかになった。遼寧省新賓県の朝鮮族の炕は、確かに漢族の様式に近いものであったし、炕の面積が徐々に縮小していく過程を見ることができた。そして池氏の指摘通り、その様式は漢族のものに似ていても、炕のもつ意味あいは漢族とはやはり大きく異なることも、先の報告書で指摘した通りであった。ここでは、これらの先行研究を踏まえ、調査で得られた資料を分析してみたい。

延辺朝鮮族の炕の特徴

延辺朝鮮族の炕の特徴は、単に炕の面積が広く、床からの高さが低いというだけではなく、炕の部屋と竈との間に仕切がなく、竈の焚き口が窪地になっていてその上に板で蓋をしていることである。しかも板の間と炕の部屋との間には段差がない。

さて、延辺で目にした朝鮮族の民家と炕であるが、彼らの多くが咸鏡南北道から移住してきたこと、そして彼らが

故郷の様式で間取りや炕を作ったと考えるならば、張保雄の分類でいうところの「複列型民家」に属し、なかでも「複列五室型民家」がその典型となるはずであるが、事例報告で述べたとおり、「複列五室型民家」の間取りは、今回の調査ではみることができなかった。むしろ延辺で目にした事例は、池氏が指摘しているとおり、「鼎厨間」のある家の型に属し、そのなかでさらに一通屋と両通屋に細分される、という方が実情に近い。もつとも張保雄もその後の研究で「複列型民家」という類型から「鼎厨間型民家」に変えており、「鼎厨間型民家」という指標は両者に共通するようになった。

ここで、私の目にした朝鮮族の間取りと炕を、張保雄の分類にあわせて、建築学的に整理し直してみたい。

まず、部屋の間取りは、ほとんどが単列の間か二間であり、複列の例といえるのは、図們市紅光郷下嘎村の某氏のみであった。但し、この地方の様式に見られる、「鼎厨間」があり、この限りにおいて、延辺朝鮮族の間取りや炕は、出身地の咸鏡南北道の様式を残しているといえる。しかもほとんどは、オンドル部屋と竈との間に壁がなく、張保雄によればこれはより伝統的な様式を残していることになる。一例だけ、壁を増設したと思われる例があったが、これは小商店であった。また、畜舎も室内にはなかった。畜舎も室内に設けるのは古い草泥房の場合で、今はまづなくなっている（金澤主編『吉林朝鮮族』吉林人民出版社一九九三）。

事例の中には縁側もなかったが、これは「複列五室型民家」のように発達した広い間取りではなかったことによる。

この点は、池氏が指摘しているとおり、一九三〇年代に移住してきた当時は、土間のある台所とオンドル部屋から成る「鼎厨間」であったが、韓国中部地方の民家と同様に壁で仕切ったり、通り間としていった。また四室造りを基本形に、次々と六室、八室に拡大していった、とする発展過程があったと考えるべきであろう。

実際、このことを裏付ける記述がある。『延辺朝鮮族自治州志』の中の朝鮮族の住宅の記述をみると、朝鮮族は単間、双間、三間からなる伝統的な形式を保持している、としている。ここでその概要を紹介したい。

移住当初は貧しく、みな草房であったが、解放後になってレンガ造りになっていったとしている。家屋は一般に南向きで、三つの空間に分かれ、入り口から入った所に大きな部屋がある。この部分は $\frac{2}{3}$ が炕で、 $\frac{1}{3}$ が竈となつてゐる。東側の部屋には炕がなく、倉庫として使われる。西側の部屋は一面に炕が設けられていて、中を二間に仕切ることもある。この場合、暖かい南側が各房で、北側が子女の寝室となる。来客の際、男子は客房へ、女の客は台所（則ち「鼎厨間」の部分）へあがる。竈には二つの鍋があり、一つは飯を、もう一つは湯を沸かしたりおかずを作る。三〜四つの鍋を置いている場合もある。炕上の敷物であるが、かつてはコーリヤンの茎で編んだ「席」を使つていたが、油紙を経て、現在ではビニール地が多い。

これはまさに光新郷偉心村の金善真氏宅の間取りとまったく同じであり（但し炕の部屋の仕切方が南北ではなく東西になつていた点は異なる）、やはりこちらの方が実際の農民の大多数を占めているのではないかと考えられる。

ところで調査では、朝鮮族の出身地を聞きそびれてしまった。全ての間取りや炕がほぼ同様の様式であつたため、その時点で出身地による差違があるとは考えられなかつたからである。調査した中で唯一、出身地を聞いたのは光新郷偉心村の金善真氏のみで、彼女は一六歳の時に南方の慶尚北道から移住してきたとのことであつた。しかし彼女の家の間取りや炕の様式は、延辺の朝鮮族によく見られるものであつた。

出身地は偶然に聞いたわけであるが、南方の出身者でも、「鼎厨間」のある様式の家に住んでいる点が注目される。しかしながら、「鼎厨間」のある様式が、出身地を越えて「延辺様式」として採用されているとはいえない。なぜなら、金善真氏も移住以来ずっとこの家に住んでいたわけではないからである。もちろん、出身地は全て聞くべきであ

ったが、現実には、出身地ごとに独自の様式を維持しているという単純なものではない。それに越境してからも、再移住を行っている可能性も高く、出身地のみを問題にしても現地で目にする様式を説明することは難しい。

なお、延辺の朝鮮族は、都市、農村を問わず、炕のことを朝鮮語で「オンドル」ではなく、「クドウル」という。方言という説明であったが、『朝鮮語大辞典』（角川書店）によると、「クドウル」は「パンクドウル」の略でオンドルと同じ意味としている。

調査データの一覧

上述の事例を一覧表に整理したものが左の「表1」である。(—は存在しないのではなく、未確認の意味) 以下、炕や竈の構造、炕卓などに象徴されている、民族間関係と文化変容の問題について、調査から読みとれる知見を考察してみたい。

表 1

氏名	民族	炕数・様式	拉門	壁	段差	竈の様式	鍋数	様式	飯卓	影響
紅光郷嘎下村										
劉氏	漢族	2 朝	／	有	25 漢	漢	2 + 1	平	円卓	朝鮮族化
某氏	朝鮮族	2 朝 + 漢	無	有	0 + 45	朝 + 板	2 + 2	平	円卓	一部漢化
長安鎮長青村										

某氏	小商店	楊天奎	趙玉臣	某氏	光新郷偉心村	金善真	相氏	延吉市内	某氏	某氏	小商店	羌氏
漢族	漢族	漢族	漢族	朝鮮族	朝鮮族	朝鮮族	漢族	朝鮮族	朝鮮族	漢族	朝鮮族	朝鮮族
1	1	2	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1
漢	漢	朝的	朝的	朝	朝	朝的+漢	朝的	朝	朝	朝	朝的	朝
／	／	／	／	有	有	／	有	／	無	有	無	有
無	無	有+	有+	無	無	有	無	無	後付	有	無	有
45	45	45+10	15	0	0	40	0	0	0	10	0	0
漢	漢	漢+窪	漢	朝+板	朝+板	漢	朝+板	朝+板	朝+板	朝+板	朝+板	朝+板
1	1	2+2	2+1	2	2	2+2	2	2	2	2	2	2
漢	—	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平
—	—	円卓	方形	—	円卓	—	—	—	—	—	—	—
傳統的漢	變則漢族	朝鮮族化	朝鮮族化	傳統的朝	傳統的朝	變則漢族	傳統的朝	傳統的朝	變則朝鮮	變則朝鮮	傳統的朝	傳統的朝

※拉門は朝鮮族式にしかないもので、漢族にはあり得ないので、無とせず、／で消すこととした。もちろん、漢族が朝鮮族の影響を受けて拉門を作らないとはいえないが、実見した事例にはそのような例は一つもなかった。

※竈との壁は、漢族の場合、伝統的にはあるのが普通なので、／で消したいところだが、小商店の事例でスペースの関係からか壁がないのが一例、楊天奎氏宅でなんと漢族でありながら壁のない炕が一つあったので、そのまま指

標として残すこととした。

※炕との段差とは、言い換えれば炕の高さでもある。単位はセンチメートル。伝統的な朝鮮族の場合、段差は〇となる。但し、楊天奎氏（漢族）宅の場合、四五十一〇としていた後者の一〇は竈と炕との段差であって、実際には竈自体が地面より一〇センチ高く作られているので、炕の高さは地面から二〇センチとなる。同様に、市内の平房の某氏（漢族）宅の場合、一〇としていたのはやはり段差であって、これも竈が一五センチほど地面より高くなっているので、炕の高さは地面から二五センチとなる。

※朝鮮族式の炕のなかで、さらに正確に言うくと、竈の高さと焚き口を被っている板との高さが同一のものと、一〇センチほどの段差（板が低くなっている）があるものがある。そうした事例は、市内の平房の某氏（漢族）と小商店（朝鮮族）の二例だけで、変則的な様式とすべきかもしれない。

※影響の部分で、「伝統的漢」「伝統的朝」はそれぞれ、伝統的な漢族の様式、伝統的な朝鮮族の様式をさす。「変則漢族」「変則朝鮮」は、それぞれ漢族、朝鮮族のものであるが、やや基本形からずれているものをさす。「朝鮮族化」は全体として朝鮮族の影響を色濃く受けている場合をさす。「一部漢化」は朝鮮族の伝統的なものに加え、漢族の炕も併設している場合をさす。

※鍋の数とは、一つの釜に設置されている鍋の数をさす。漢とは伝統的漢族式という意味で、すり鉢状になっている中華鍋が設置されている。「平」とは、この地方で見られる朝鮮族様式の鍋で、通常、二つのうち一つは湯を沸かすための深い鍋で、縁の高さが一〇センチほどあり、蓋がある。もう一つは、鍋底がくぼんでなく、フライパンのように平になっており、しかも縁が一、二センチと低く、竈の表面とほとんど段差がない。この上に鍋などをおいて炊事する。

漢族と朝鮮族との相互影響について

遼寧省新賓県での調査では、満族や朝鮮族が漢族の影響を受けていたが、延辺朝鮮族自治州では、逆に漢族が朝鮮族の影響を受けていることが分かった。つまり、多数派に少数派が影響を受けるといふ単純な図式が成立していることになる。朝鮮族が大多数を占める光新郷偉心村の相氏（漢族）が「ここでは漢族は少数民族だ」といつていたのが印象的であった。

【表1】に整理した全十三の事例の内訳は、漢族の事例が七例、朝鮮族の事例が六例ある。漢族の七例のうち、炕の様式において、伝統的漢族のものが一例、変則的漢族が二例、朝鮮族化したものが三例ある。恣意的な調査なので統計値を出すことはできないが、それでも朝鮮族の影響を受けている例が多いといえる。変則的漢族と分類した光新郷偉心村の相氏宅（漢族）の場合も、朝鮮族の影響を受けて変則的なものになっている。

炕にみられる朝鮮族の影響とは、伝統的な漢族のものに比べ、炕の面積も大きくなり、高さも低くなっていることである。紅光郷下嘎村の劉氏（漢族）の炕は、部屋一面に炕が広がっているため炕沿もなく、炕だけをみると限りなく朝鮮族のものに近い。長安鎮長青村の楊天奎（漢族）の場合、一つの炕は竈との間に壁がなく、段差も少なく、おまけに焚き口が窪みになっており、これに板で蓋をすれば、炕と竈とも完全に朝鮮族の様式となるほどである。趙玉臣（漢族）の場合も、壁はあるものの、二つの炕とも部屋一面に広がり、これも炕だけを見ると、限りなく朝鮮族のものに近い。光新郷偉心村の相氏（漢族）も、基本形は漢族であるが、炕の形態や地面に絨毯を敷くなどの点で、朝鮮族の影響を受けている。

朝鮮族の影響を受けた漢族の例で興味深いのは、漢族でも、室内や竈周りが非常に清潔に保たれ、平座して過ごす時間が長いなど、生活様式まで影響を受けている点である。後述するように、炕沿に腰掛けることもないため、地卓もない。

逆に、紅光郷下嘎村の某氏（朝鮮族）の如く、朝鮮族が伝統的な朝鮮族の炕のほかに、漢族式の炕を一つ作っている例も一例あった。この家の場合、年寄りの座る便を考えてとのことであった。こうした様式が、延辺でよく見られるものかどうかは判断できないが、これはまさに、先述の朴慶輝が分類した「半朝鮮式・半中国式住宅」に相当することから、他の地方でもよく見られるものと考えられる。そしてこれが延辺でも見られるというのが興味深い。

このように双方が互いの影響を受けているとはいっても、注目されるべきは、様式の完全な受容までは至っていない点である。漢族の場合、第一に、炕の高さが竈とまったく同一までには至っていない。第二は、竈の卓口が窪みになっているところまでは似ていても、その上に板で蓋をすることまではしていない。一方、朝鮮族の場合も、炕は漢族式でもその竈は朝鮮族式である点である。さらに、いくら漢族の炕が朝鮮族の影響を受けて大きくなったとはいえ、漢族で拉門を設けている例は一つもなかった。

なお、この拉門であるが、遼寧省新賓県での調査ではかつてあったという話を聞いていただけであったが、当地で実際に使われているのを初めて見た。六例ある朝鮮族の事例のうち、拉門があるのが三例、ないのが三例となっている。拉門がないのは、農村では紅光郷下嘎村の某氏と、市内では平房街の某氏と、小商店のみである。紅光郷下嘎村の某氏は漢族式の炕も併設している家で、比較的新しい建築であるため、新築にあわせて拉門を作らなかったのである。市内では平房街の某氏と小商店も、比較的新しい家であることと、共に一間だけで、部屋が狭い故に拉門を設けていないと考えられる。市内の「火炕楼」の羌氏宅では、狭いながらも拉門があったが、これは比較的古い建築と

いうことで説明がつきそうである。こうしてみると、朝鮮族の住宅においても、拉門が徐々に消えつつあるといえよう。

朝鮮族の影響という点では、竈の大きさ（竈に設置される鍋の数）と、鍋の形状も指標となり得る。これについては遼寧省新賓県での調査報告でも言及しているが、当地の調査でもこの点に注目した。

韓景旭の「朝鮮族と漢族」（『中国東北部朝鮮族の民族文化』所収）によると、移民当初、朝鮮族の竈には鍋が三つも四つも置けるのに対し、漢族の竈は鍋が一つしか置けなかったが、その後漢族も朝鮮族にならって複数の鍋をかける竈に変わっていったという。また、金旭賢の「食文化の変遷—延辺朝鮮族の事例」（『中国東北部朝鮮族の民族文化』所収）によると、移住当初、延辺朝鮮族が携帯してきた釜はあまり深くなく、伝統的な平壤釜と腰の広い朝鮮釜であったが、一九五〇年代以降、延辺朝鮮族自治州が成立すると、朝鮮族釜工場が建てられ、そこで平壤釜よりも丈を高くし、飯を焚く以外にも饅頭やパンを作れるように深くし、釜の腰にも縁をつけえた延辺釜が発明されたという。

竈に設置された鍋の数でいうと、朝鮮族は例外なく二つであるが、漢族も新しい民家の場合、ほとんどが二つか、二つと一つとの組み合わせとなっている。一つだけというのは、長安鎮長青村の古い民家と小商店のみで、前者は伝統的漢族、後者は商店という特殊な事情による。

鍋の形状であるが、中華鍋を設置していたのは、長安鎮長青村の古い民家のみで、他は全て、朝鮮族様式となっている。ところで、当地でみた朝鮮族様式の鍋は、遼寧省の新賓県でみたものとは異なるものであった。

二つある鍋のうち、通常は、二つのうち一つは湯を沸かすための深い鍋で、縁の高さが一〇センチほどあり、蓋がある。いわゆる、縁の高い「延辺釜」である。湯を沸かす鍋の位置であるが、左右両方の例があり、基本的には自由

のようであるが、多くの場合、焚き口からみて右側にある。もう一つは、鍋底がくぼんでなく、フライパンのように平らになっており、しかも縁が一、二センチと低く、竈の表面とほとんど段差がない。この上に鍋などをおいて炊事する。この様式の鍋を遼寧省新賓県では見たことがなかった。家によっては二つとも平な鍋を設置しているところもあった（紅光郷下嘎村の劉氏宅の鍋は三つとも平らであったし、長安鎮長青村の楊天奎氏宅では、二つある竈のうち、左側の竈の鍋が二つとも平らであった）。

平な鍋の場合、さらにその上へべつの鍋を置くわけだから、熱効率が悪くなると思われる。利点としてはさまざまな鍋を置ける点であろう。おそらく朝鮮族の場合、竈と炕との間に壁がないため、煙が部屋に入り込むのを防ぐため、平らな鍋で完全に竈の口を被っているものと考えられる。

いづれにせよ、竈に設置された鍋の数、および鍋の形状に関しては、漢族も朝鮮族の影響を大きく受けていることが見て取れる。

卓に関していうと、漢族、朝鮮族を問わず、飯卓が画一化されていることが目につく。即ち、趙玉臣（漢族）の事例を除いて、円形の折りたたみ式（日本のちゃぶ台のよう）で、卓の面には色鮮やかな花の絵が描かれており、明らかに工房で大量生産されたものであった。同じデザインのもものは遼寧省新賓県の調査では見たことがなかった。逆に、当地では新賓県で目にしたような伝統的な古い自家製の炕卓は一つも使われていなかった。おそらく過去のある時期に、安価できれいな工業製品が回り、従来のものを駆逐していったものと思われる。しかも、この新しい卓は、地元の人たちによって「炕卓」とは呼ばれず、「飯卓」と呼ばれているのも興味深い。おそらく伝統的なものとの識別を語彙の上で行っているものと思われる。

また、当地では遼寧省新賓県で目にしたような、炕卓と地卓との併用というのも見られなかった。というより、地卓を目にすることがなかった。これは明らかに炕の構造と関係がある。朝鮮族は当然としても、当地の漢族は朝鮮族の影響からか、面積が大きく、地面から低い炕をつくっている例が多い。そのため、「炕沿」に腰掛けるということもせず、炕の上で平座して過ごす時間が長い。このため、地卓を使わず、飯卓のみを使っているものと思われる。そのためか、飯卓を二つ以上もっている家が多かった。

農村と都市との生活習慣の違いについて

大連から旅順へ案内してくれた中国の旅行社に勤める葛さんにも炕について色々話を聞いてみた。彼女は大連市の近郊の農村出身（大連市は六つの区、三つの市、ひとつの県からなるが、その中の瓦房店市の農村）で、「老家」（実家）は平屋なため、炕があり、子供のころも炕で育ったし、現在も残っているという。ちなみに彼女の出身の村では、かつて纏足をしていた女性が何人もいるという。私自身、二〇年ほど前に台湾で纏足の老婆を見たことはあるが、現在でも中国にいるというのは驚きだった。彼女はこの地方では珍しいことではなく、実際、運転手の男性も親族に纏足の女性がいるとのことだった。女性の年齢を九〇歳としても、辛亥革命以降もしばらくの間、纏足の習慣が残っていたことになる。

炕の上では、老人は男女ともあぐらをかくが、若い女性は両脚を揃えて横に置いて坐る。「炕沿」の素材について聞くと、確かに「水泥」（セメント）のものがあるが、実家のは木材であるという。「炕席」について聞くと、「炕席」

はもう使っていないという。なぜなら「炕席」は編んであるため、拭きにくいし、一〇年も使うとぼろぼろにほぐれてくるので不便だという。現在ではビニール地のものになっている。これだと拭き掃除がしやすいという。

炕の上での生活と大連市での生活について聞いたところ、炕のない（椅子とベッドの）生活に慣れてしまったので、実家に帰ると逆に炕は「不習慣」（慣れない）という。炕の上は固いし、長時間坐っていると足が痺れてくるし、冬は炕が熱すぎることもあって不便であり、もう炕の生活には戻りたくないという。

彼女に「火炕楼」について質したところ、大連市内でも近郊でもそういうのは今までみたことがないという。大連には「暖気楼」はあるが、これは普通のスチーム暖房の部屋で、床下に温水パイプが張り巡らされているのではないという。

「火炕楼」と「暖気楼」について

延吉市内で、琿春からきた人に「火炕楼」について聞いてみた。すると自分の家も「火炕楼」の二階だという。一九九一年に新築されたものだという。延吉では「火炕楼」が取り壊されつつある話をする、琿春は田舎だから、一九九一年でも「火炕楼」を建てているのだという。延吉では「暖気楼」に住んでいるというので、どちらがいいか聞いてみた。答えは明確で、絶対に「暖気楼」の方がいいという。「火炕楼」は石炭を運び入れたりススを掃き出したりが大変だし、風の強い日は煙が部屋の中にあつたよって煙たいという。しかも「炕頭」側はやけどするぐらい熱く、「炕梢」側は逆に冷たい。「暖気楼」だと管理も楽だし、部屋全体が暖かいという。

但し、「暖気楼」にも唯一欠点があり、暖気は「公暖」といって、建物ごとに行うが、政府の規定で一月からしか使えない。「火炕楼」なら寒いときに好きなだけ暖をとることができるが、「暖気楼」の場合、一〇月は寒くて仕方がないという。どうするのかと聞くと、ただ服を重ね着るしかないという。暖房費は、月額、一平方メートル当たり二五元で、値段的には石炭の方が安いという。「公暖」は量が減るものの四月まで続くという。このことを東北地方、特に黒竜江省によく出張にいかれていた日本の商社マンに話したところ、確かにその通りで、一〇月にいくと寒くてしょうがないので、一〇月の出張は避けていたという。

「暖気楼」になると、「炕頭」という表現や概念もなくなっていくものと思われる。これは日本でいうと、いろいろがなくなり、「横座」と呼ばれる上座が名実ともに消滅していく過程とよく似ていよう。

「火炕楼」について、遼寧省の新賓県出身の劉正愛氏に質したところ、新賓県でも一棟だけ「火炕楼」が県城にあったのを記憶しているという。一九八〇年代、友人がその「火炕楼」に住んでいて訪ねた経験があるという。しかし各室内で石炭を焚くため煙臭く不便なため、その後取り壊され、現在では県内に「火炕楼」は一棟も残されていないのではないかとのことであった。

なお、延辺における「暖気楼」の中には、家によって「電気オンドル」と呼ばれるものを設置している例もあるという。これは厚さ二、三センチで表面は化粧板になっており、床面積に応じて加工し、コンクリート地面の上に設置する。電気床暖房の後付版といったところであろうか。さらに、家によっては、温水パイプを床下に設置しているところもあるという。こうした床暖房を当地では「地暖炕」とよび、「彼の家は地暖炕になっているよ」などというという。特に延吉では、近年になって新築される「暖気楼」は、ほとんどが初めから全室、温水パイプを床下に設置した「地暖」になっているという。こうした部屋に入居するのは朝鮮族に限られず、漢族も入居するという。こうした

傾向はこの数年のことであることから、国交を樹立した韓国の影響と考えられる。この話を劉正愛氏にすると、新賓県の「暖気楼」には、そのような例はないとのことであった。

今後の展開と研究の課題

前回の遼寧省での調査経験を踏まえた上で、今回の調査結果を振り返ると、当然のこととはいえ、地域によって炕の様式がかくも異なるのか、という感想をもった。特に同じ朝鮮族でも、私が遼寧省でみた炕の様式とまったく異なることは、正直驚きであった。延辺での炕の写真を遼寧省新賓県出身の劉正愛氏に見せたところ、彼女もこのように炕は初めて見るという。逆に、延辺の朝鮮族の人に、遼寧省での朝鮮族の炕の話をする、朝鮮族はみな延辺の様式だと思っていた、と同様に驚かしてしまった。朝鮮族内の差違は、朝鮮族自身もあまり自覚していないようである。さらに延辺出身の若い朝鮮族の人に、池氏が分類している、「テシル」（遼寧省）、「コンカン」（黒竜江省）という用語について聞いたところ、一度も聞いたことがないという。さらに「チョンジュカン」「アレノモク」「ウンモク」などの語彙について聞いてみると、田舎の年寄りがいるような家では使うだろうが、都会では普段はまづ使わないとのことであった。

漢族の炕は基本的には遼寧省でみたものと同じであるが、現実には、多くが朝鮮族の影響を受けており、多種多様なバリエーションが存在した。とくに新しく建て直した家屋ほど、伝統的な漢族のものから離れており、自由な発想でもって建てているのが印象的であった。しかも、漢族が朝鮮族の影響を受けるということも、正直、驚きであった。そうした漢族は平座して過ごす時間が他の漢族よりも多く、室内も朝鮮族のように清潔に保っていた。

今回の概況調査では、選ばれた村はあくまで恣意的であるし、訊ねた家も限りがある。決して一つの村を網羅的にまわったわけではない。従って、この報告では、その村、あるいは地域の類型を出すことはできないし、それが本稿の目的でもない。もつとも、たとえ網羅的な調査を行ったとしても、果たしてその村の類型なるものを出すことができるのか、甚だ疑問に思える。なぜなら、調査時点での最大多数の例はだせても、必ずしもそれが「伝統的」とは限らないからである。しかも村や個人の経済状態にも大きく左右されよう。都市近郊で豊かであれば、改築が盛んで、より伝統的なものは少なくなっていく。それに、そうした現実に進行している多様化を無視し、ひたすら古民家を採って「伝統的」なものだけを採取するというのは、調査方法としては正しいとはいえない。データから伝統的なものを分別する必要はあるが、現実に行っている現象のおもしろさから目を背けることになってしまふからである。今回の概況調査では、満族の炕を見ることができなかった。自治州の満族人口が三%と少なく、なかなか探し出すことができなかったのがその理由であるが、遼寧省新賓県でみたように、「万字炕」を維持しているのか、それとも漢族同様、朝鮮族の影響を強く受けているのか、興味のあるところである。また、時間の関係で、炕にまつわる日常生活に関してはほとんど聞けなかった。基本的には遼寧省新賓県で聞いたものと同じと考えられるが、詳細は今後の課題としたい。

羌氏によると、「火炕楼」は今後取り壊す方向にあるようで、今後数十年で市内から姿を消すとのことであった。琿春などの地方ではまだ残る可能性がある。一方、遼寧省の新賓県の如く、すでになくなっているところもある。大連もかつては存在したのかも知れないが、少なくとも現在は無いようである。

消えつつあるのは「火炕楼」だけではない。延吉市内の「平房」も、城内のものは一年以内に全て取り壊す予定であるという。但し、郊区の「平房」はまだ残るといふ。おそらく一〇年後は、延吉市内の様子も大きく変わり、炕に

関していえば、「平房」も「火炕楼」もなくなり、大連のような大都市と同様になっているであろう。

この意味で、今回は良いタイミングで延辺朝鮮族自治州に行くことができたと思っている。特に調査中は、イラク戦争の真つ最中であり、漢族も朝鮮族もイラクでの情勢には多大な関心をよせていた。特に延辺の朝鮮族にとつては、「次は北朝鮮」という意識があり、親しくなった朝鮮族の人々と、北朝鮮の問題について本音の話を聞くことができた。そして帰国するころには、延辺でも、北京における「非典型肺炎」(SARS)の浸透が、噂で広がっていた。

最後に、突然の訪問にもころよく自宅内を見せていただいた方々に感謝したい。移住以来、幾多の苦勞を重ねてきた彼らが、今後、新たな戦禍や病魔に巻き込まれることのないことを祈りたい。

引用・参考文献

池春相 一九九九 「住文化の特色―民家類型とその変容」中国東北部朝鮮族民俗文化調査団編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』所収

岩槻善之 一九二四 「朝鮮民家の家構に就いて」『朝鮮と建築』三輯二号

延辺朝鮮族自治州概況編写組一九八四『延辺朝鮮族自治州概況』延吉／延辺人民出版社（大村益夫訳一九八七『中国の朝鮮族』神戸／むくげの会）

延辺朝鮮族自治州地方志編集委員会編一九九六『延辺朝鮮族自治州志』上下 北京／中華書局

韓景旭 一九九九「朝鮮族と漢族」中国東北部朝鮮族民族文化調査団編『中国東北部朝鮮族の民族文化』所収

金澤主編一九九三『吉林朝鮮族』吉林人民出版社

金旭賢 一九九九「食文化の変遷—延辺朝鮮族の事例」中国東北部朝鮮族民族文化調査団編『中国東北部朝鮮族の民族文化』所収

佐々木衛・方鎮珠編二〇〇一『中国朝鮮族の移住・家族・エスンシティ』東京／東方書店

高崎宗司一九九六『中国朝鮮族』東京／明石書店

千種達夫一九六七『満州家族制度の慣習』（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）東京／一粒社

中国朝鮮族青年学会編・館野哲ほか訳 一九九八『聞き書き中国朝鮮族生活誌』東京／社会評論社〔原書は一九九

二年『中国朝鮮族移民紀実』（朝鮮語）延辺人民出版社〕

中国東北部朝鮮族民俗文化調査団編一九九九『中国東北部朝鮮族の民俗文化』東京／第一書房

鶴嶋雪嶺 一九九七『中国朝鮮族の研究』大阪／関西大学出版部

張保雄著・佐々木史郎訳 一九八一（一九八九）『韓国の民家』東京／古今書院

西澤治彦 二〇〇二「炕のある暮らし—遼寧省新賓滿族自治県の農村調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』三四—

一 東京／武蔵大学人文学会

朴慶輝一九八八『朝鮮族民俗史研究』沈陽／遼寧民族出版社（未見）

（二〇〇三年五月十三日

受理）